

東広島市内遺跡発掘調査報告書 2

—諏訪神社周辺遺跡—

—西中郷遺跡—

—福神1号遺跡—

2019

東広島市教育委員会

東広島市内遺跡発掘調査報告書 2

—諫訪神社周辺遺跡—

—西中郷遺跡—

—福神 1 号遺跡—

2 0 1 9

東広島市教育委員会

はしがき

東広島市は、昭和 49 年の市制施行以来、「賀茂学園都市建設」、「広島中央テクノポリス建設」の 2 大プロジェクトを推進することで、広島大学の統合移転などの学術研究機能の集積が進み、産業基盤の整備、高速・広域交通ネットワークなどの都市基盤の充実を背景に、全国から注目を集める成長都市として、飛躍的な発展を遂げてまいりましたが、次のステージとして「輝け県央の地、東広島」を合言葉に、「仕事を暮らしもナンバーワン」であると、他の地域の皆様からも評価される「選ばれる都市、東広島」を目指しています。

一方、内陸部の山々や美しい田園、瀬戸内海など、居住地域を包むように広がる風光明媚で豊かな自然環境、若者が集い、新たな社会的価値を創造する大学などの知的資源、高度なものづくり産業の集積、「日本の 20 世紀遺産 20 選」に選定された西条の酒造施設群に代表される歴史的・文化的な資産など多くの地域資源や魅力があります。

今回発掘調査が実施された西条東北町・田口、高屋町高屋堀地区周辺には、弥生時代の拠点的集落や、安芸国分寺などの古代の遺跡、中世～近世の集落跡などが集中し、近代以降も宅地開発が進んでいます。

本報告書は、集合住宅新築及び住宅団地造成に伴って実施した発掘調査の成果を記録したものです。地域の歴史を解明する一助となり、埋蔵文化財の保護に対する理解を深めていただくための資料として広く活用されることを願っております。

なお、発掘調査及び報告書作成にあたり、御指導、御協力をいただきました関係各機関、研究者の皆様及び地元の方々に対し、深く感謝いたします。

平成 31 年 3 月

東広島市教育委員会
教育長 津森毅

東広島市内遺跡緊急発掘調査報告書 2

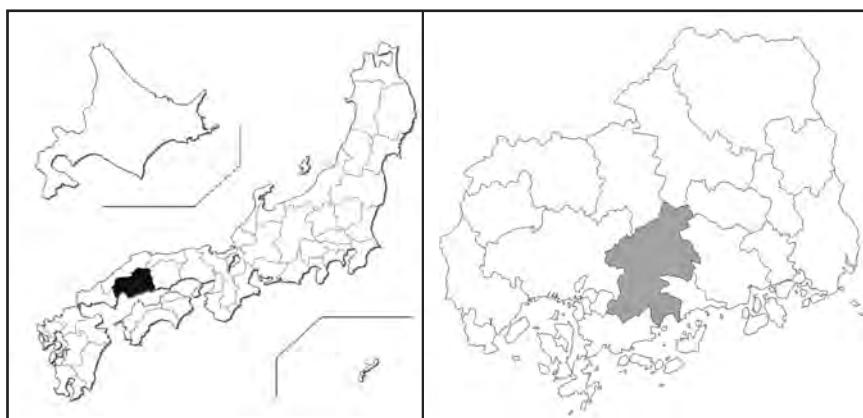
目次

遺跡の位置と環境

- 1 諏訪神社周辺遺跡
- 2 西中郷遺跡
- 3 福神 1号遺跡

例　言

- 1 本書は、東広島市教育委員会が発掘調査を実施した、西条東北町 D-room 新築工事に係る諏訪神社周辺遺跡、田口西中郷宅地開発事業に係る西中郷遺跡、(仮称)高屋堀団地に係る福神 1号遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査（現地調査）は平成 29（2017）年度に、整理・報告書作成作業は平成 30（2018）年度に実施し、主査：石垣敏之と埋蔵文化財調査員：日浦裕子・盛菜つみが担当し、東広島市教育委員会職員が協力した。
- 3 本書で使用した方位は、世界測地系座標北（国土座標第Ⅲ系）である。
- 4 本書で使用した遺構の表示記号は、次のとおりである。
SB：掘立柱建物跡、SD：溝状遺構、SK：土坑、SX：性格不明遺構、P：柱穴・ピット
- 5 第 1 図は国土交通省国土地理院発行の 1：50,000 地形図『海田市・竹原』を縮小して使用した。
- 6 調査で得られた資料については、すべて東広島市教育委員会が保管している。



広島県東広島市の位置

遺跡の位置と環境

東広島市は、広島県南部のほぼ中央に位置する人口 19 万人の都市である。市域の中央には標高約 200m の西条盆地が広がり、平坦部を黒瀬川が蛇行して南流し、その周辺を標高約 400 ~ 600m の山々が囲んでいる。ここでは、西条盆地を中心として今回報告する 3 遺跡の周辺について概観する。

旧石器時代の遺跡としては、広島大学構内の西ガガラ遺跡⁽¹⁾で後期旧石器時代と思われる住居跡や土坑が検出されている。溝口 2 号遺跡⁽²⁾の遺物包含層よりナイフ形石器 1 点が見つかっている。

縄文時代の遺跡としては、中山池南遺跡⁽³⁾から住居、土器、石器が出土している。また、縄文早期に相当する遺跡である、ぶどう池南遺跡第 2 地点⁽⁴⁾からは炉跡や石鏃製作跡が検出されている。

弥生時代の遺跡としては、木葉文を有する壺が出土した貞付谷遺跡⁽⁵⁾や小西遺跡⁽⁶⁾、大分県周辺に分布する下城式土器が出土した西東子遺跡⁽⁷⁾、準構造船を転用した可能性が指摘されている木製品が出土した黄幡 1 号遺跡⁽⁸⁾、竪穴住居跡から銅鉈が出土した淨福寺 2 号遺跡⁽⁹⁾、南海産イモガイ製の腕輪が出土した行摠 1 号遺跡⁽¹⁰⁾などが注目される。また、後期から終末期の環濠と考えられる溝が確認された青谷 1 号遺跡⁽¹¹⁾を始め、古市 4 号遺跡⁽¹²⁾、助平 1 号遺跡⁽¹³⁾などの他、東広島ニュータウン遺跡群や西本遺跡群などでは弥生時代の大規模なムラの様子が多数発見されている。

一方、再加工された細形銅劍や竪穴住居内からガラス製小玉が出土した横田 1 号遺跡⁽¹⁴⁾や青銅製の斧が出土した大槻 3 号遺跡⁽¹⁵⁾のような弥生時代後期の拠点的集落が低湿地帯を挟み、対峙する丘陵上に存在していたことなどが判明してきている。

古墳時代に入ると、5 世紀前半に築造された県下最大規模の前方後円墳である史跡三ツ城古墳⁽¹⁶⁾に代表されるように、東広島市域全般で多くの古墳が作られるようになる。竪穴系横口式石室を内部主体とする助平古墳⁽¹⁷⁾、横穴式石室を内部主体とする大槻第 2 号古墳⁽¹⁸⁾帆立貝式古墳と考えられる長者スクモ塚古墳⁽¹⁹⁾、三角縁神獸鏡や素環頭太刀が出土している白鳥古墳⁽²⁰⁾や、朱文鏡や碧玉製石鉈が出土した仙人塚第 1 号古墳⁽²¹⁾などが確認されている。集落跡としては、古市 4 号遺跡、是石遺跡⁽²²⁾などが確認されている。

古代では、西本 6 号遺跡⁽²³⁾から棟持柱を持つ大規模な掘立柱建物跡が検出されている。ここから出土した墨書土器の「解□」の文字などから、飛鳥時代天武朝の大祓に伴う神殿跡と推測されている。また、高屋うめの辺 1 号遺跡⁽²⁴⁾からは、役人の階級を表す帶飾りの巡方や祭祀に使用したとみられる陶馬などが出土している。

律令時代、史跡安芸国分寺跡⁽²⁵⁾が当地域に建立された。その周辺には安芸国分寺周辺遺跡⁽²⁶⁾が存在し、安芸国府の存在が指摘されているが、現時点では詳細は不明である。そのほか、円面硯、転用硯などが出土した青谷1号遺跡や、鋳造工房があったとされる大地面遺跡⁽²⁷⁾などが確認されており、当地域が重要な役割を担っていたことが推測できる。

また、須恵器の窯跡が三永水源地周辺に操業される。代表的なものに三永水源地北窯跡群⁽²⁸⁾、東ガガラ窯跡⁽²⁹⁾がある。

中世になると、山口県に本拠を置く大内氏が安芸国支配のため鏡山城跡⁽³⁰⁾を築城し、出雲の尼子氏と勢力争いをこの地で展開した。一方、平賀氏は出羽国から入部して、南北朝時代には御薦宇城⁽³¹⁾を居城として高屋地域の支配を強め、後に白市に白山城⁽³²⁾を築き本拠を移した。白山城と対峙する御土居遺跡⁽³³⁾は平賀氏の居館跡と推測される。御土居遺跡からは複数の掘立柱建物跡が検出されている他、16世紀後半が中心となる輸入陶磁器や宴席や儀礼に使用されたと思われる多量の土師質土器が出土している。

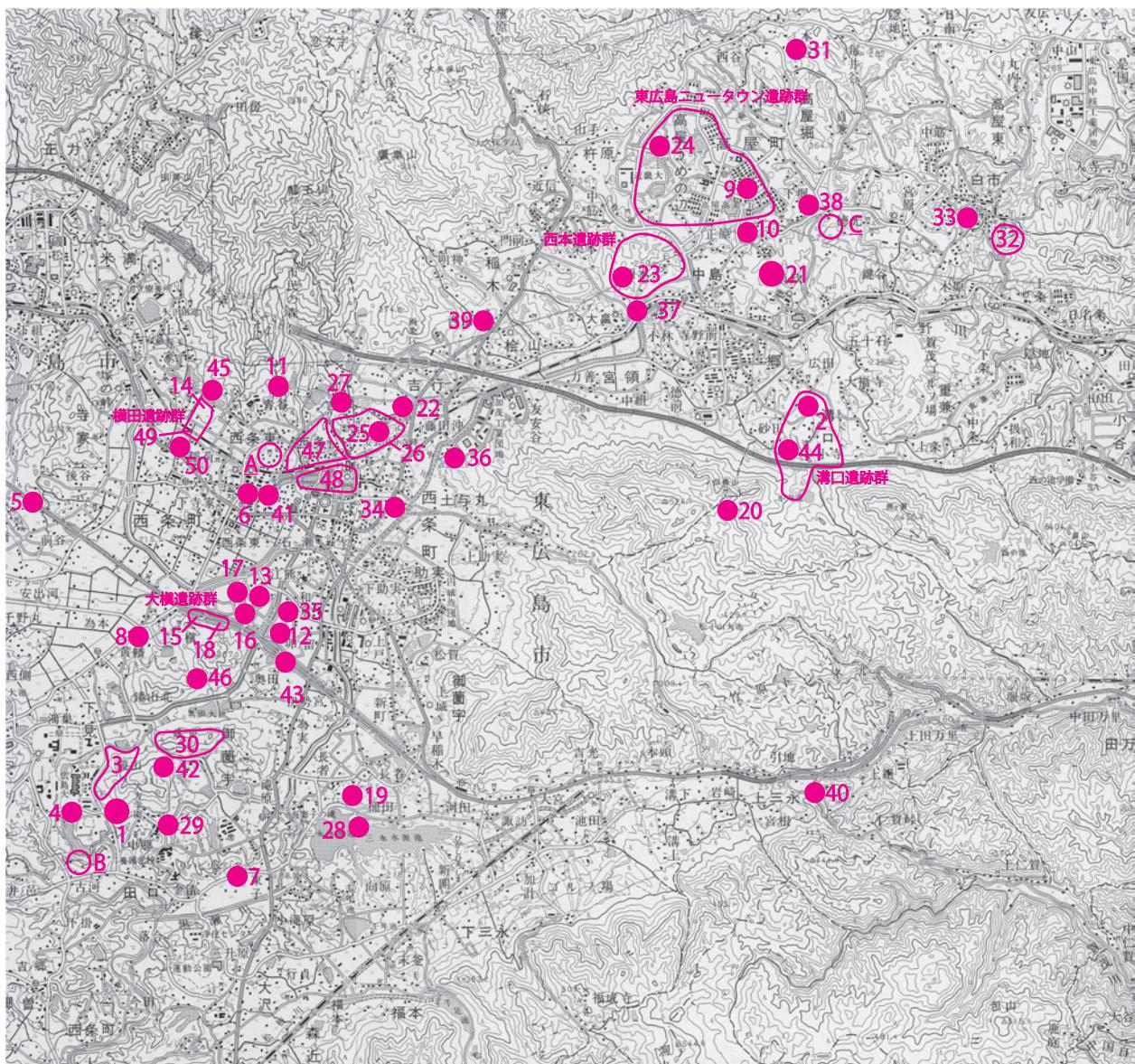
なお東広島市内には、城の土居屋敷跡⁽³⁴⁾、狐が城跡⁽³⁵⁾、向城跡⁽³⁶⁾、古慈喜城跡⁽³⁷⁾、下堀土居屋敷跡⁽³⁸⁾、檜山氏館跡⁽³⁹⁾など多くの山城や居館が存在し、本市の遺跡数の約15%程度を占めている。

また、荒谷土居屋敷跡⁽⁴⁰⁾などの方形居館が多く確認されていることも当該地域の特徴であろう。集落遺跡としては、山崎1号遺跡⁽⁴¹⁾、鏡西谷遺跡⁽⁴²⁾の他、掘立柱建物跡や炉跡などを検出した鍛冶場跡と考えられる遺構が発見された道照遺跡⁽⁴³⁾、集落を方形に囲む大溝が発見された溝口4号遺跡⁽⁴⁴⁾などが確認されている。

才免遺跡⁽⁴⁵⁾、黄幡第4号古墓⁽⁴⁶⁾などで検出された積石塚は、中世の信仰の痕跡と考えられ、興味深い。

御建遺跡⁽⁴⁷⁾からは、中世の道と考えられる遺構が検出された。御建遺跡は、後述する四日市遺跡の前段階の集落跡とも推測されており、中世から近世に移り変わる時代の様子を伺う意味でも注目される。

近世の遺跡としては、近世西国街道沿いに発展した宿場町である四日市遺跡⁽⁴⁸⁾が挙げられる。建物跡や釀造遺構などが検出され、江戸時代から近代の陶磁器などが多量に出土している。そのほか、中・近世の井戸跡などの土坑や溝状遺構が確認された横田3号遺跡⁽⁴⁹⁾や、掘立柱建物跡が検出された貞松遺跡⁽⁵⁰⁾などの集落遺跡も確認されている。



A. 諏訪神社周辺遺跡 B. 西中郷遺跡 C. 福神1号遺跡

1. 西方ガラ遺跡
2. 溝口2号遺跡
3. 山中池南遺跡
4. ぶどう池南遺跡第2地点
5. 貞付谷遺跡
6. 小西遺跡
7. 西東子遺跡
8. 黄幡1号遺跡
9. 净福寺2号遺跡
10. 行摠1号遺跡
11. 青谷1号遺跡
12. 古市4号遺跡
13. 助平1号遺跡
14. 横田1号遺跡
15. 大槻3号遺跡
16. 史跡三ツ城古墳
17. 助平古墳
18. 大槻2号古墳
19. 長者スケモ塚古墳
20. 白鳥古墳
21. 仙人塚第1号古墳
22. 是石遺跡
23. 西本6号遺跡
24. うめの辺1号遺跡
25. 史跡安芸国分寺
26. 安芸国分寺周辺遺跡
27. 大地面遺跡
28. 三永水源地北窯群
29. 東ガガラ窯跡
30. 鏡山城跡
31. 御菌宇城
32. 白山城
33. 御土居遺跡
34. 城の土居屋敷跡
35. 狐が城跡
36. 向城跡
37. 古慈喜城跡
38. 下堀土居屋敷跡
39. 檜山氏館跡
40. 荒谷土居館跡
41. 山崎1号遺跡
42. 鏡西谷遺跡
43. 道照遺跡・道照館跡
44. 溝口4号遺跡
45. 才面遺跡
46. 黄幡第4号古墓
47. 御建遺跡
48. 四日市遺跡
49. 横田3号遺跡
50. 貞松遺跡

周辺遺跡分布図 (1:75,000)

国土地理院 1:50,000 地形図を縮小して使用

註

A：諏訪神社周辺遺跡 B：西中郷遺跡 C：福神 1号遺跡

- (1) 『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書II』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室 平成16(2004)年
- (2) 『溝口2号遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成17(2005)年
- (3) 『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書III』広島大学埋蔵文化財調査室 平成17(2005)年
- (4) 「ぶどう池南遺跡第2地点」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書IV』広島大学埋蔵文化財調査室 平成19(2007)年
- (5) 「貞付谷遺跡」『金平山遺跡・貞付谷遺跡発掘調査報告書』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成4(1992)年
- (6) 『小西遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成10(1998)年
- (7) 『西東子遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成8(1996)年
『西東子遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成23(2011)年
- (8) 『黄幡1号遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成17(2005)年
- (9) 『東広島ニュータウン遺跡群II』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成5(1993)年
- (10) 『行摠1号遺跡発掘調査報告書』広島県教育委員会 平成26(2014)年
- (11) 『青谷1号遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成14(2002)年
- (12) 「古市4号遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書I』東広島市教育委員会 平成4(1992)年
- (13) 「助平1号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(I)』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和58(1983)年
- (14) 『横田1号遺跡発掘調査報告書』大成エンジニアリング株式会社 平成24(2012)年
- (15) 「大槻3号遺跡」『大槻遺跡群』昭和60(1985)年
- (16) 『史跡三ツ城古墳発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成16(2004)年
- (17) 『助平古墳』『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書I』東広島市教育委員会 平成4(1992)年
- (18) 「大槻2号遺跡」『大槻遺跡群』昭和60(1985)年
- (19) 『前方後円墳集成 -中国・四国編』山川出版社 平成3(1991)年
『探訪・広島の古墳』芸備友の会 平成3(1991)年
- (20) 『東広島市の文化財』東広島市教育委員会 平成12(2000)年
- (21) 『千人塚古墳』東広島市教育委員会・広島大学文学研究科考古学研究室 平成23(2011)年
- (22) 「是石遺跡」『奥田・是石・鶯田・藤田』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成元(1989)年
- (23) 『西本6号遺跡発掘調査報告書II』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成9(1997)年
- (24) 『高屋うめの辺1号・2号遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成24(2012)年
- (25) 『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書I～IX』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成11～19(1999～2007)年
『安芸国分寺東方遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成9(1997)年
- (26) 『安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成21(2009)年
『安芸国分寺周辺遺跡』『聾門遺跡・安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成27(2015)年
- (27) 『大地面遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成20(2008)年
- (28) 『三永水源地窯跡群詳細分布調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成19(2007)年
- (29) 『東方ガラ窯跡』『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告』
- (30) 『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第2集』広島県教育委員会 平成6(1994)年
『鏡山城その歴史と意義 -大内氏の地方支配を探る-』東広島市教育委員会 平成11(1999)年
- (31) 『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第2集』広島県教育委員会 平成6(1994)年
- (32) (31)に同じ
- (33) 『御土居遺跡発掘調査報告書』(個人住宅)財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成17(2005)年
『御土居遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成18(2006)年
『御土居遺跡発掘調査報告書II』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成19(2007)年
- (34) (31)に同じ
- (35) 「狐ヶ城跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(I)』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和58(1983)年
- (36) (31)に同じ
- (37) 『古慈喜城跡発掘調査報告』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成8(1996)年
- (38) (31)に同じ
- (39) (31)に同じ
- (40) 『荒谷土居屋敷跡発掘調査概報』広島県教育委員会 昭和54(1979)年
『荒谷土居屋敷跡発掘調査概報』東広島市教育委員会 昭和55(1980)年
『荒谷土居屋敷遺跡の調査』『上泓土居屋敷跡・荒谷土居屋敷遺跡発掘調査報告書II』東広島市教育委員会 平成5(1993)年
- (41) 『山崎1号遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成7(1995)年
- (42) 『鏡西谷遺跡の調査』『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書I』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室 平成15(2003)年
- (43) 『道照遺跡』広島県教育委員会 昭和57(1982)年
『道照遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成31(2019)年
- (44) 『溝口4号遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成22(2010)年
- (45) 『才免遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成29(2017)年
- (46) 『黄幡第4号古墓発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成21(2009)年
- (47) 『御建遺跡発掘調査報告I』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成22(2010)年
『御建遺跡発掘調査報告II』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成25(2013)年
- (48) 『四日市遺跡発掘調査報告書I～IV』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成16～19(2004～2007)年
- (49) 『横田3号遺跡』『横田3号遺跡・市地遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成29(2017)年
- (50) 『貞松遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成21(2009)年

東広島市西条東北町

す わ じん じや しゅう へん
諏訪神社周辺遺跡

例言

- 1 本書は、平成 29・30（2017・2018）年度に東広島市教育委員会（以下「市教委」という。）が株式会社不動産シティーから委託を受けて発掘調査を実施した、西条東北町 D-room 新築工事に係る諏訪神社周辺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺構の実測・写真撮影は、石垣・日浦・盛が行った。遺物の実測は盛が、写真撮影は石垣が行った。
- 3 本書の内容は調査関係者で検討し、執筆は石垣が行い、編集は盛と石垣が行った。
- 4 遺物実測図と写真図版の番号は同一である。
- 5 第 1 図は東広島市発行の 1 : 2,500 東広島市地形図（O-8・P-8）を使用した。

本文目次

1- I はじめに	1-1
1- II 遺構と遺物	1-3
(1) 調査の概要	1-3
(2) 遺構と遺物	1-3
(3) まとめ	1-6

挿図目次

第 1-1 図 諏訪神社周辺遺跡周辺地形図（1 : 2,500）	1-2
第 1-2 図 諏訪神社周辺遺跡遺構配置図（1 : 150）	1-4
第 1-3 図 P1・2、SK1、SD2・3 遺構実測図（1 : 40）	1-5
第 1-4 図 諏訪神社周辺遺跡出土遺物実測図（1 : 3、1 : 1）	1-5

表目次

表 1 諏訪神社周辺遺跡出土遺物観察表

図版目次

図版扉 作業風景：写真奥の森が諏訪神社（南から）

図版 1-1 a. 調査区西側完掘（北から）
b. 調査区南側完掘（東から）
c. SD3 完掘（東から）
d. SD2 完掘（西から）
e. SK1 完掘（東から）

図版 1-2 a. 配管工事立会状況（北から）
b. 基礎工事立会状況（北から）
出土遺物

1- I はじめに

諏訪神社周辺遺跡は、西条東北町 D-room 新築工事に伴って広島県東広島市西条東北町で発掘調査が実施された。以下、調査に至る経緯を概述する。

平成 28 年 12 月 6 日付けで有限会社東亜不動産から東広島市教育委員会教育長へ文化財の有無及び取扱いについて協議があった。東広島市教育委員会（以下「市教委」という。）は、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「諏訪神社周辺遺跡」であるが、遺構の詳細が不明なため、市教委が試掘調査を実施した。その結果、事業計画範囲の一部でピットや溝状遺構などを検出したため、平成 29 年 1 月 12 日付け、東広教文第 539 号で諏訪神社周辺遺跡を確認したことを回答した。

その後、市教委と事業者で遺跡の現状保存について協議を重ねた結果、計画変更によって遺跡の大部分を盛土保存することとなつたが、擁壁などの一部については、記録保存も止むを得ないとして基本合意した。平成 29 年 2 月 17 日付けで、株式会社不動産シティーから埋蔵文化財発掘の届出（土木工事の届出）が提出された。大部分は盛土保存ため慎重工事の対象となつたが、建物基礎の一部については、記録保存のための事前の発掘調査が必要な旨を平成 29 年 2 月 28 日付け、東広教文第 646 号で通知した。

平成 29 年 3 月 13 日付けで株式会社不動産シティーから市教委あてに発掘調査の依頼が提出され、平成 29 年 3 月 17 日付け、東広教文第 699 号で承諾する旨回答した。平成 29 年 4 月 4 日付けで、株式会社不動産シティーと発掘調査の業務委託契約と覚書が締結され、平成 29 年 4 月 10 日から 4 月 14 日まで発掘調査（現地調査）を実施した。報告書作成作業及び収蔵作業は平成 30 年 5 月 21 日付けで契約を締結して実施した。

本章は、以上のような経緯を経て実施した発掘調査の成果をまとめたものである。当地の文化財資料として、また文化・歴史探究の一助として広く活用していただければ幸いである。なお、建物基礎の一部と給排水の配管工事が埋蔵文化財に影響を与える可能性があり、工事に立会ったところ、ピットや溝状遺構が検出されたため、不時緊急調査に切り替え対応した記録も掲載している。

事業者である株式会社不動産シティー、調整等を図っていただいた大和ハウス工業株式会社東広島支店から発掘調査・整理作業・報告書作成作業の便宜を図っていただいた。また、発掘調査にあたって、土地の所有者や地域の方々の多大なご協力を得た。末筆ながら記して心から感謝の意を表したい。

調査体制

平成 29・30 年度

東広島市教育委員会

教育長：津森 肅

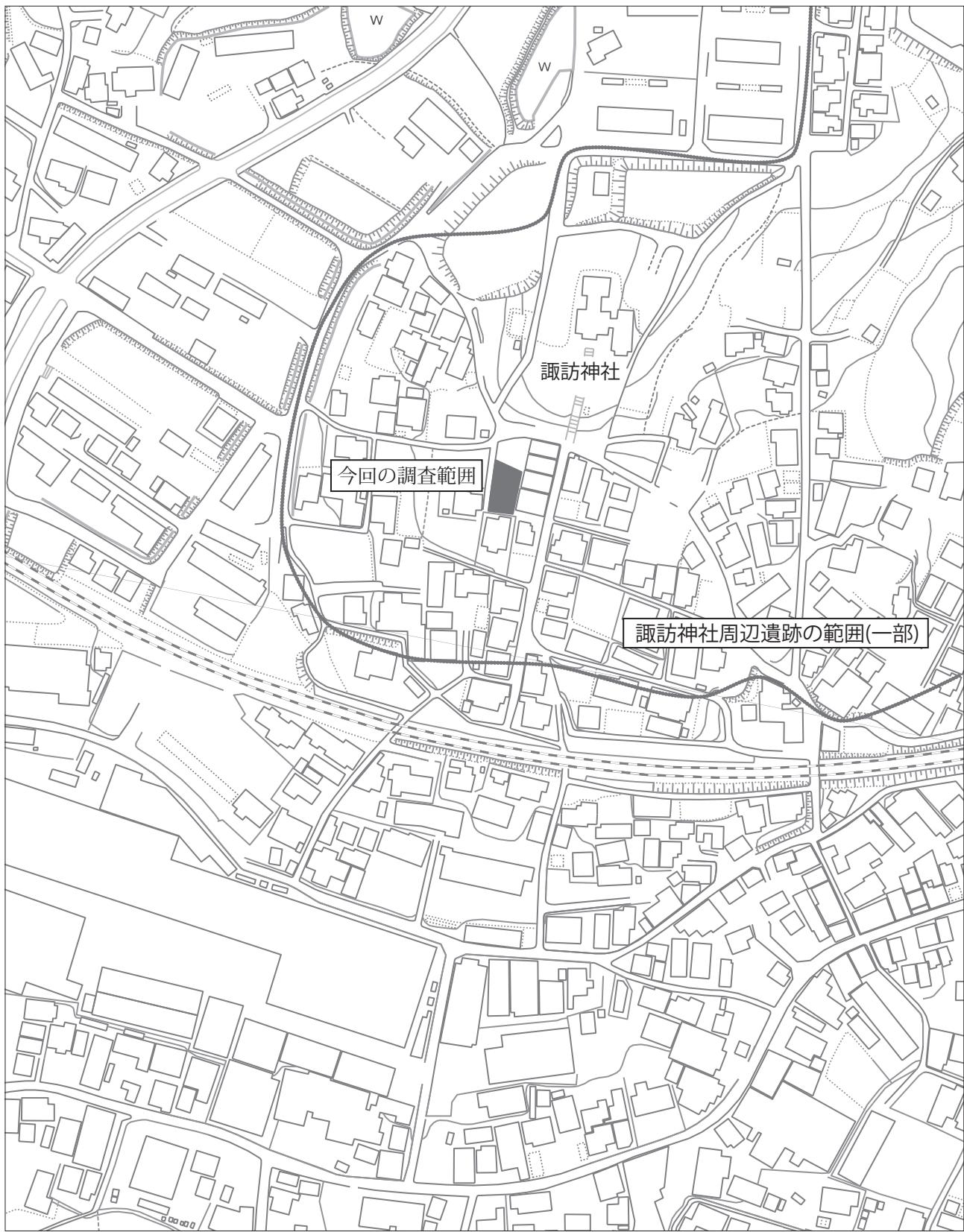
生涯学習部長：下宮 茂（平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日）、國廣政和（平成 30 年 4 月 1 日～）

生涯学習部次長兼文化課長：岡田誠有（平成 29 年 4 月 1 日～）

参事兼出土文化財管理センター所長兼調査係長：妹尾周三

調査 調査係主査：石垣敏之、埋蔵文化財調査員：日浦裕子、盛菜つみ

事務 調査係主査：松仁 猛（平成 29 年 4 月 1 日～）、事務職員：片山由紀子



第 1-1 図 諏訪神社周辺遺跡周辺地形図 (1 : 2,500)

1-II 遺構と遺物

(1) 調査の概要

発掘調査は、試掘調査によって得られたデータ（遺構面までの深さ、堆積土・遺物包含層の状況、遺物の出土状況など）を基に、重機を使用して表土を掘削し、遺構検出面を人力で精査して行った。

擁壁部分のみが対象になっており、「L」字状の調査区になっている。調査区の北側は著しく削平されており、表土直下で明褐色系砂質土の遺構面が露出した。遺構面の標高は、189.0m～190.3mで、南に向けてやや深くなる。

検出された遺構は、溝状遺構 5 条、土坑・性格不明土坑 2 基、ピット 8 基である。

遺物は、弥生土器、須恵器、陶磁器、石製品、小玉などがコンテナ（340 mm×540 mm×100mm）1.5 箱分出土した。そのほとんどは図示し得ないほどの小破片である。

(2) 遺構と遺物

SK1（第 1-3 図、図版 1-1）

擁壁部分の調査区で検出された、不整形な平面形を呈する土坑である。検出状況で、直軸約 2m、短軸約 1m、深さ 0.2～0.3m を測る。埋土は暗褐色土の単層で、底部も不整形を呈する。図示し得なかつたが弥生土器が出土している。

出土遺物（第 1-4 図、図版 1-2）

1・2 は弥生土器の甕型土器である。磨滅が著しいが、2 の口縁部に凹線文がみられる。

SX1（第 1-2 図、図版 1-1）

擁壁部分の調査区で検出された、不整形な平面形を呈する土坑であるが、調査区外へ広がるため、詳細は不明である。

底部は不整形で、ピットや土坑状窪みもあるため、土坑というより自然地形への堆積（遺物包含層）の可能性が高い。

出土遺物の多くは弥生土器であるが、須恵器も若干出土しており、ガラス小玉も 1 点確認された。

出土遺物（第 1-4 図、図版 1-2）

3 はガラス小玉である。直径約 2mm の小型のもので、気泡が多くみられる。

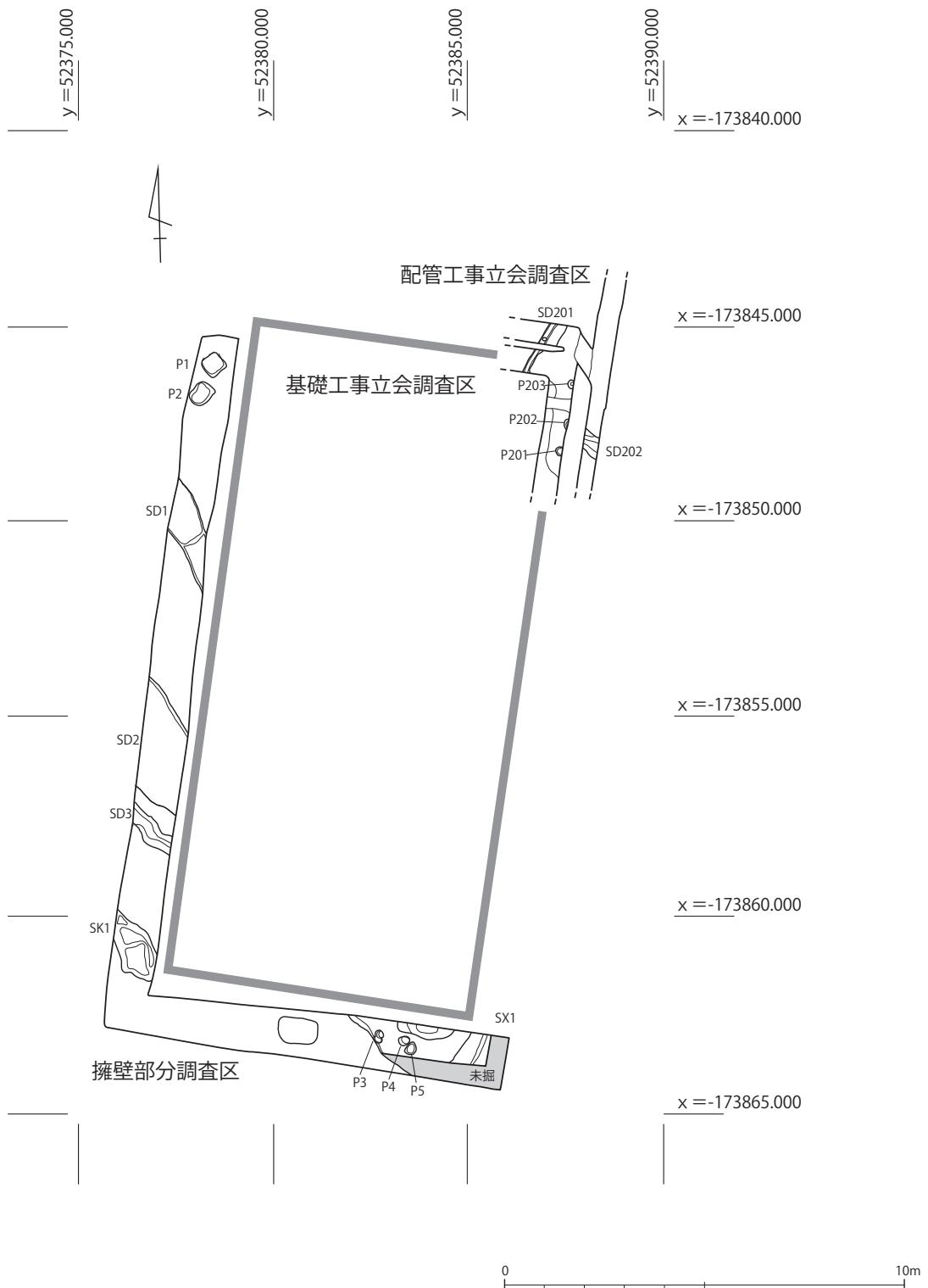
SD1～3（第 1-2、1-3 図、図版 1-1）

SD1～3 は擁壁部分の調査区で検出された、調査区外へと延びる北西－南東方向の溝状遺構である。最大幅は、SD1 が約 1m、SD2 が約 2m、SD3 が約 0.5m を測る。深さはそれぞれ約 0.15m、約 0.1m、約 0.4m を測る。

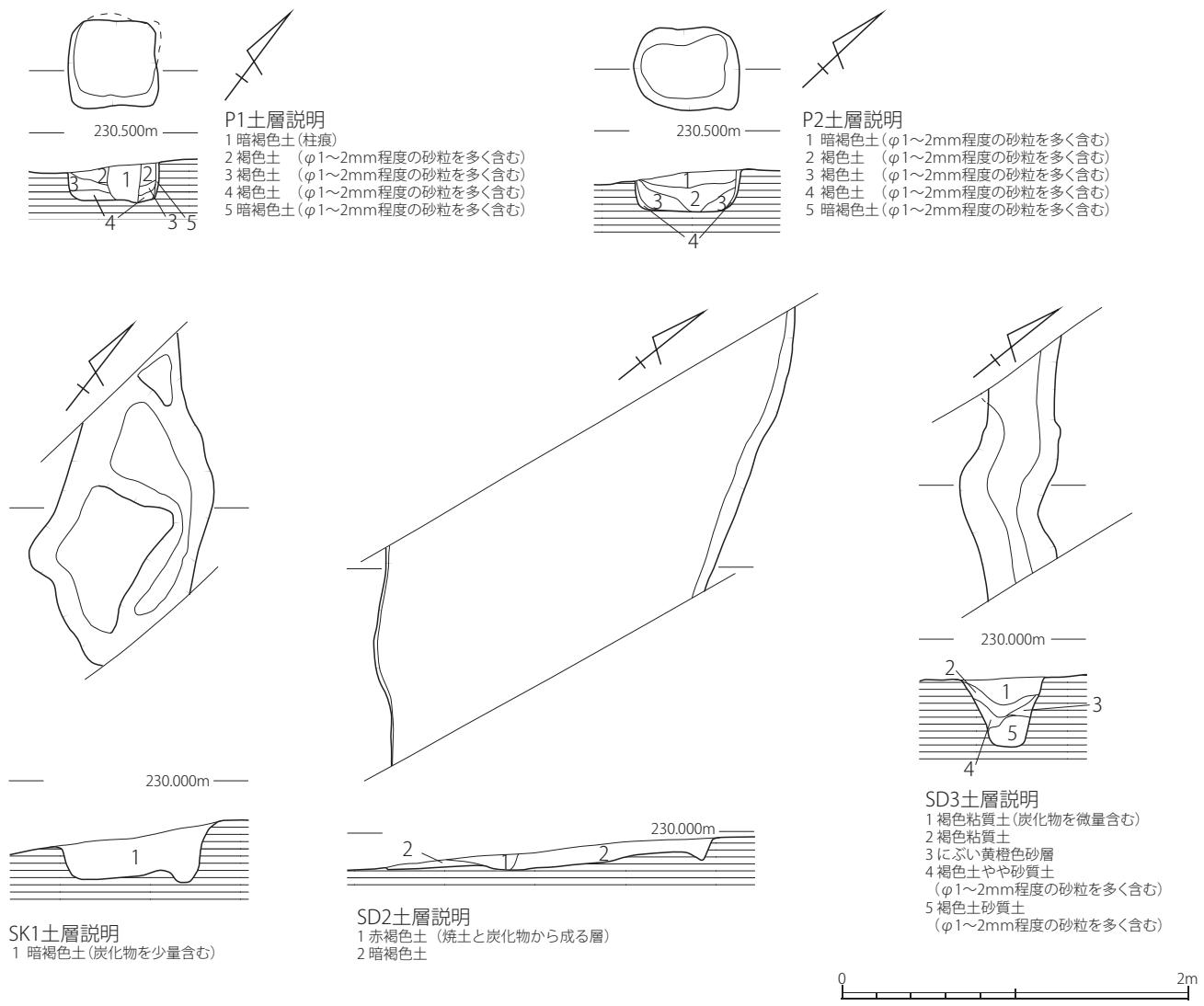
埋土は、SD1 が炭化物を少量含む暗褐色土、SD2 は焼土と炭化物を多く含む上層と暗褐色土の下層に分層された。SD3 は褐色系の粘質土である。図示し得なかつたが弥生土器が出土している。

SD201・202（第 1-2 図、図版 1-2）

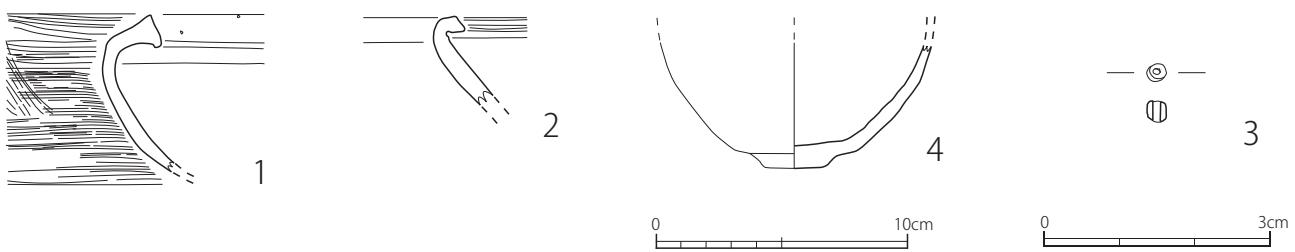
建物基礎及び配管工事の立会中に検出された溝状遺構である。最大幅は、SD201 が約



第1-2図 諏訪神社周辺遺跡遺構配置図（1：150）



第 1-3 図 P1・2、SD2・3、SK1 実測図 (1 : 40)



第 1-4 図 出土遺物実測図 (1 : 1, 1 : 3)

0.2m、SD202 が約 0.5m を測る。深さはそれぞれ約 0.2、約 0.2m を測る。

埋土は、SD201 が炭化物を多量に含む暗褐色粘質土、SD202 が多量の炭化物と焼土ブロックを含む褐色粘質土である。

出土遺物（第 1-4 図、図版 1-2）

4 は弥生土器の底部である。直径約 2.5cm のボタン状の高台を有する。

P1・2（第 1-2 図、図版 1-1）

擁壁部分の調査区で検出された、平面形が方形を呈するピットである。P1 では柱痕が確認され、弥生土器が出土した。

P3～5（第 1-2 図、図版 1-1）

SX1 の底面で検出された直径 0.2～0.3m を測るピットである。

P201～203（第 1-2 図、図版 1-2）

建物基礎及び配管工事の立会中に検出されたピットである。直径 0.2～0.3m、深さ 0.1～0.3m を測る。

（3）まとめ

本遺跡は、諏訪神社を中心とした丘陵上に位置する集落遺跡である。過去には、平成 6 年（1994）年（1）と平成 10（1998）年（2）に発掘調査事例があり、弥生時代中期後半から弥生時代終末期の集落跡が確認されている。

今回の発掘調査は、調査区が限定的であり、遺構の広がりさえも確認することが出来なかつたが、弥生土器・須恵器などと共にガラス小玉を検出することができた。ガラス小玉は、墳墓以外から出土する例は少なく、貴重な資料を得ることができた。

当該地域は、駅近の好条件ではあるが幅員の狭い道路が多いためか、あまり開発が進んでいなかった。しかし、近年、建て替えなどに伴う埋蔵文化財包蔵地開発の相談が寄せられており、今後ますます文化財保護と開発の調整が難しくなる可能性が高い。

註

(1)財団法人東広島市教育文化振興事業団『諏訪神社周辺遺跡発掘調査報告書』1995

(2)財団法人東広島市教育文化振興事業団「諏訪神社周辺遺跡」『市内遺跡緊急調査報告書』2000

表1 諏訪神社周辺遺跡 遺物観察表

遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) ()は復元値	胎土	焼成	色調	調整	備考
1	SK1	弥生土器	甕	口径：— 器高：残存4.5 底径：—	良	密	外面：浅黄橙 内面：浅黄	外面：ナデ 内面：ナデ	
2	SK1	弥生土器	甕	口径：— 器高：残存3.4 底径：—	不良	密	外面：にぶい黄橙 内面：浅黄橙	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土に礫多く含む
3	SX1	ガラス製品	小玉	最大長：0.28 径：0.26 孔径：0.1	—	—	淡青色	—	重量：0.01g
4	SD201	弥生土器	壺か甕	口径：— 器高：残存4.8 底径：2.4	不良	粗	外面：明黄褐 内面：にぶい黄橙	—	

図 版



作業風景：写真奥の森が諏訪神社（南から）

図版 1-1



a. 調査区西側完掘（北から）



b. 調査区南側完掘（東から）



c. SD3 完掘（東から）



d. SD2 完掘（西から）



e. SK1 完掘（東から）

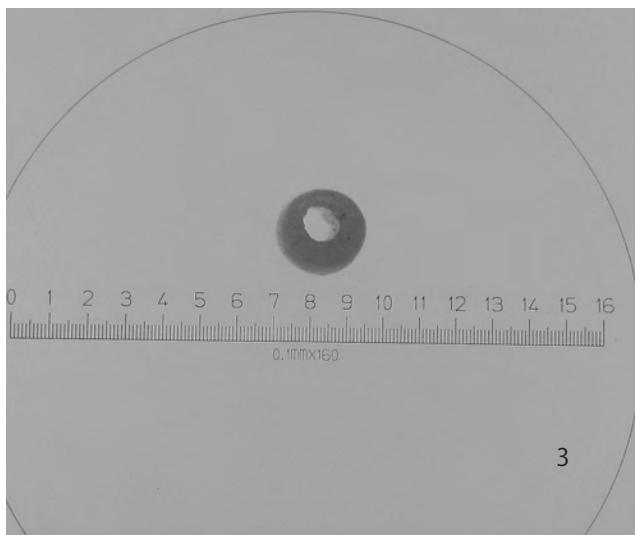
図版 1-2



a. 配管工事立会状況（北から）



b. 基礎工事立会状況（東から）



出土遺物

東広島市西条町田口

にし なか ごう
西中郷遺跡

例言

- 1 本書は、平成 29・30（2017・2018）年度に東広島市教育委員会（以下「市教委」という。）が創建ホーム株式会社から委託を受けて発掘調査を実施した、田口西中郷宅地開発事業に係る西中郷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺構の実測・写真撮影は、石垣・日浦・盛が行った。遺物の実測は盛が、写真撮影は石垣が行った。
- 3 本書の内容は調査関係者で検討し、執筆は盛が行い、執筆・編集は盛と石垣が行った。
- 4 遺物実測図と写真図版の番号は同一である。
- 5 第1図は東広島市発行の1:2,500 東広島市地形図（R-7・S-7）を使用した。

本文目次

2- I はじめに	2-1
2- II 遺構と遺物	2-4
(1) 調査の概要	2-4
(2) 遺構と遺物	2-4
2- III まとめ	2-9

挿図目次

第2-1図 西中郷遺跡周辺地形図（1:2,500）	2-2
第2-2図 西中郷遺跡遺構配置図（1:100）	2-3
第2-3図 SK1～5、SD3、P4・13・24・29 実測図（1:30）	2-5
第2-4図 出土遺物実測図（1:3）	2-7

表目次

表1 西中郷遺跡出土遺物観察表

図版目次

図版扉 完掘全景（南西から）

図版 1-1 a. 完掘全景（南西から）
b. SK1 検出状況（南西から）
c. SK2 断面（南から）
d. SD3・P29 切りあい（南から）
e. SK3 断面（南から）

図版 2-2 a. SK5 断面（南から）
b. P4 断面（東から）
出土遺物

2- I はじめに

平成 27 年 6 月 5 日付けで創建ホーム株式会社から東広島市教育委員会教育長へ文化財の有無及び取扱いについて協議があった。東広島市教育委員会（以下「市教委」という。）は、当外地は周知の埋蔵文化財包蔵地「西中郷遺跡」であるが、遺構の詳細が不明なため平成 27 年 6 月 9 日付け、東広教文第 163 号で遺跡の有無及び範囲を確認するための試掘調査が必要な旨を回答した。平成 27 年 6 月 15 日付けで試掘調査の依頼があり、市教委が試掘調査を実施した。その結果、事業計画範囲の一部でピットや土坑などを検出したため、平成 27 年 6 月 29 日付け、東広教文第 201 号で西中郷遺跡を確認したこと回答した。

その後、市教委では、遺跡の現状保存について事業者と協議を重ねた結果、計画変更によって宅地部分は盛土保存することとなったが、団地内道路部分については、記録保存も止むを得ないとして基本合意した。

平成 28 年 4 月 14 日付けで、創建ホーム株式会社から埋蔵文化財発掘の届出（土木工事の届出）が提出された。大部分は盛土保存ため慎重工事の対象となったが、団地内道路部分については、記録保存のための事前の発掘調査が必要な旨を平成 28 年 4 月 21 日付け、東広教文第 36 号で通知した。

平成 29 年 5 月 19 日付けで創建ホーム株式会社から市教委あてに発掘調査の依頼が提出され、平成 29 年 6 月 2 日付け、東広教文第 166 号で承諾する旨回答した。平成 29 年 6 月 8 日付けで、創建ホーム株式会社と発掘調査の業務委託契約と覚書が締結され、平成 29 年 7 月 25 日から 8 月 8 日まで発掘調査（現地調査）を実施した。報告書作成作業及び収蔵作業は平成 30 年 8 月 28 日付けで契約を締結して実施した。

本章は、以上のような経緯を経て実施した発掘調査の成果をまとめたものである。当地の文化財資料として、また文化・歴史探究の一助として広く活用していただければ幸いである。

事業者である創建ホーム株式会社から発掘調査・整理作業・報告書作成作業の便宜を図っていただいた。また、発掘調査にあたって、土地の所有者や地域の方々の多大なご協力を得た。末筆ながら記して心から感謝の意を表したい。

調査体制

平成 29・30 年度

東広島市教育委員会

教育長：津森 毅

生涯学習部長：下宮 茂（平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日）、國廣政和（平成 30 年 4 月 1 日～）

生涯学習部次長兼文化課長：岡田誠有（平成 29 年 4 月 1 日～）

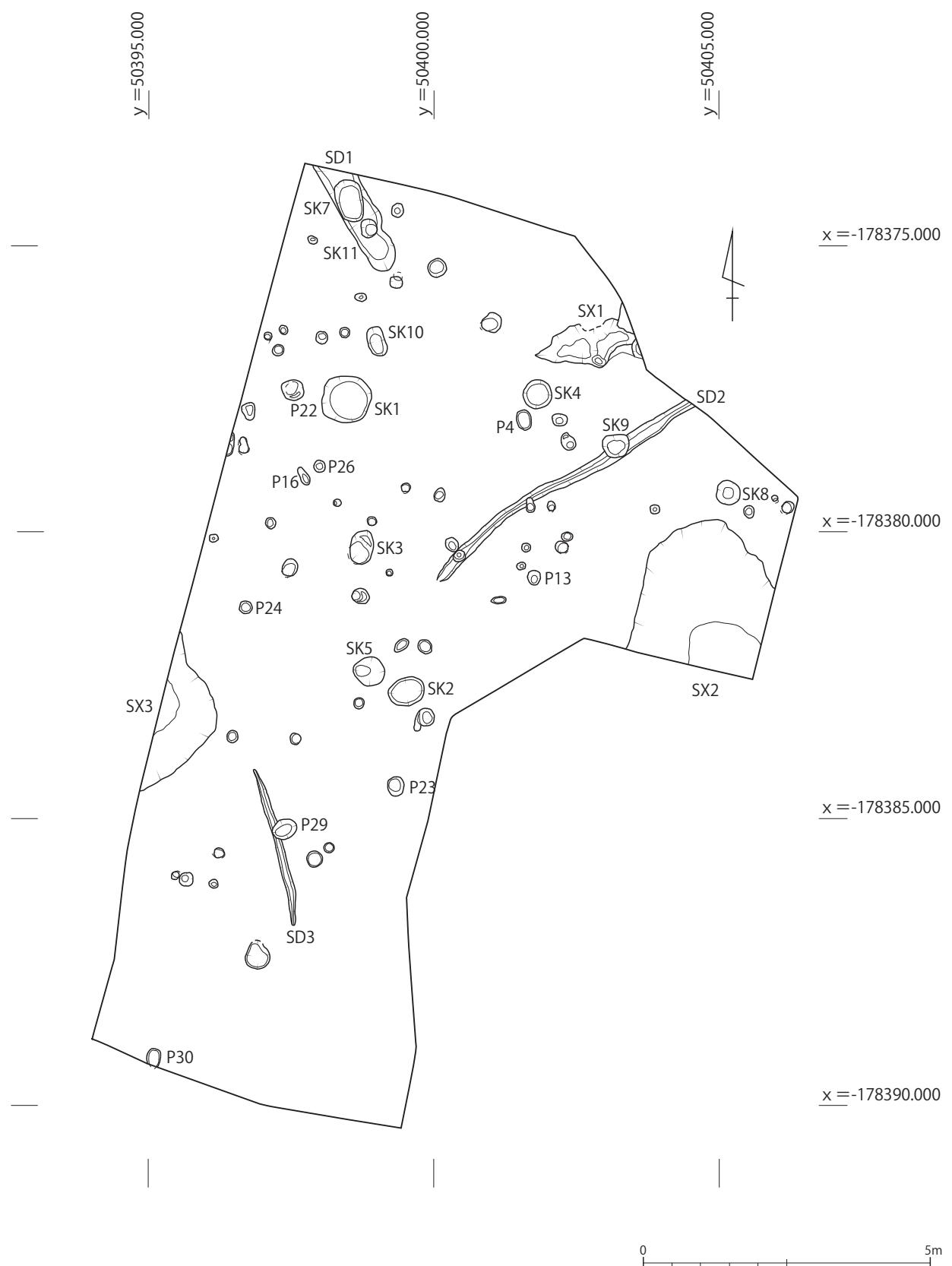
参事兼出土文化財管理センター所長兼調査係長：妹尾周三

調査 調査係主査：石垣敏之、埋蔵文化財調査員：日浦裕子、盛 菜つみ

事務 調査係主査：松仁 猛（平成 29 年 4 月 1 日～）、事務職員：片山由紀子



第2-1図 西中郷遺跡周辺地形図（1：2,500）



第2-2図 西中郷遺跡遺構配置図（1：100）

2-II 遺構と遺物

(1) 調査の概要

発掘調査は、試掘調査によって得られたデータ（遺構面までの深さ、堆積土・遺物包含層の状況、遺物の出土状況など）を基に、重機を使用して表土を掘削し、遺構検出面を人力で精査して行った。

調査区は南に向けて開いた平坦地である。表土直下で明褐色系砂質土の遺構面が遺存している。遺構面の標高は、189.0m～190.3mでほぼ平坦となっていた。

検出された遺構は、溝状遺構3条、土坑10基、性格不明遺構3基、ピット32基である。なお、土坑とピットは、発掘調査現地で任意に付けた番号（SK・P）のまま報告しており、明確に区分するものではない。

遺物は、須恵器、土師質土器、陶磁器などがコンテナ（340 mm×540 mm×100mm）2箱分出土した。そのほとんどは図示し得ないほどの小破片である。

(2) 遺構と遺物

土坑

SK1（第2-3図、図版2-1）

平面形が円形を呈する土坑である。検出状況で、直径0.87m、深さ約0.7mを測る。埋土の堆積状況は大きく2層に分けることができる。（I - 第1・2層：黄褐色粘質土～にぶい黄色粘質土、II - 第3～7層：にぶい黄褐色砂質土～褐色砂質土）土坑内上層（I）には15cm～30cm程度の石材と備前系の大甕の破片（遺物番号1・2）が2個体出土している。埋甕土坑として井戸の可能性も考えられるが、砂質の地山では保水が困難であり、いずれの大甕も完形ではないため、廃棄土坑の可能性が高い。下層（II）からの出土遺物はない。

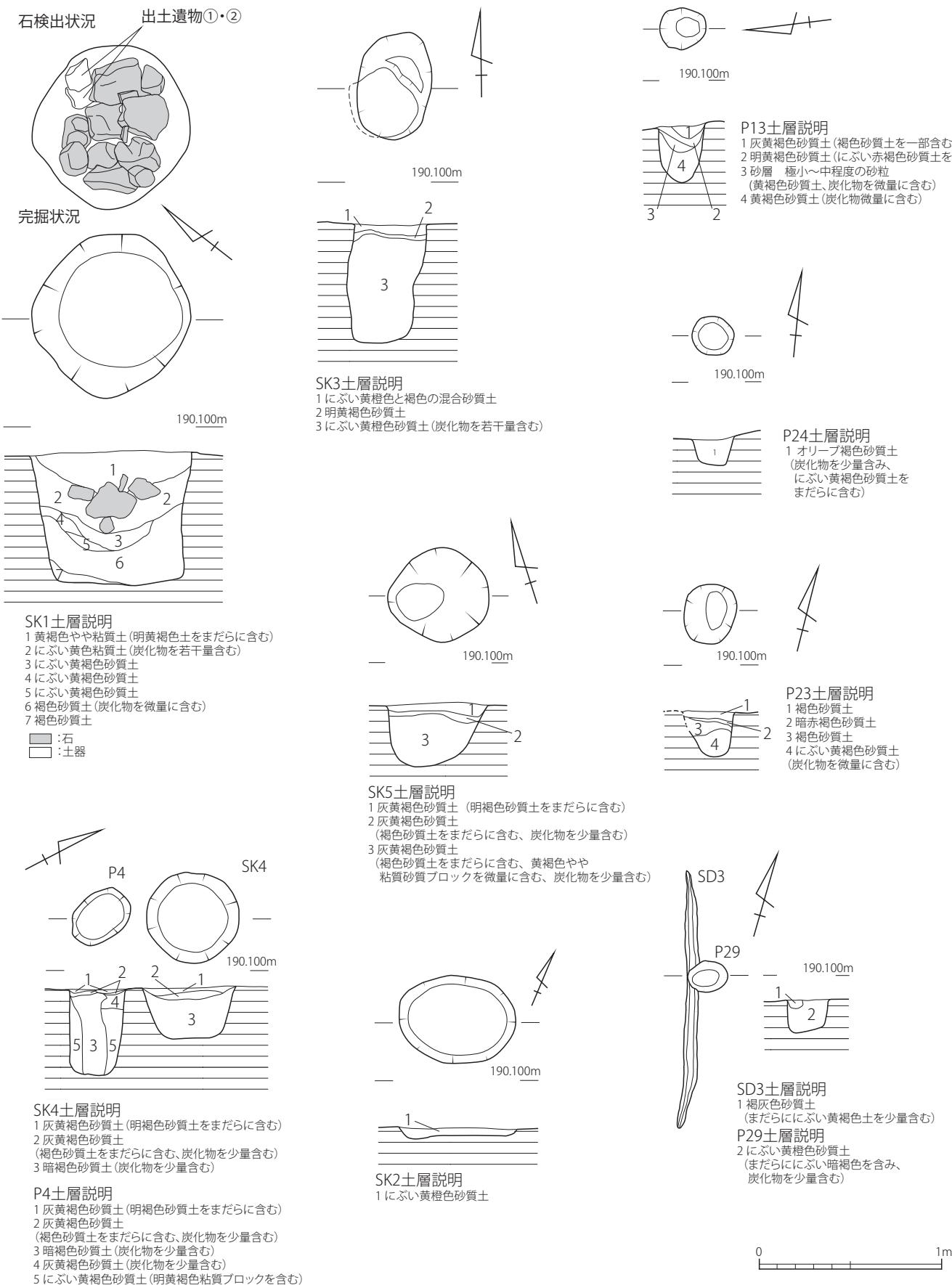
SK2～5・7～11（第2-3図、図版2-1・2-2）

SK2は平面形が楕円形を呈する土坑である。検出状況で、長軸0.64m、短軸約0.46m、深さ0.04mを測る。SK3は平面形が楕円形を呈する土坑である。検出状況で、直径0.8m、深さ約0.4mを測る。SK4は平面形が円形を呈する土坑である。検出状況で、直径0.5m、深さ約0.38mを測る。SK5は平面形が不整な円形を呈する。検出状況で、長軸0.54m、短軸0.5m、深さ約0.34mを測る。埋土の堆積状況は黄褐色砂質土であり、炭化物を少量含む。

SK7は平面形が楕円形を呈する土坑である。SD1の直下から検出され、長軸0.7m、短軸0.4m、深さ約0.2mを測る。埋土の堆積状況はにぶい黄褐色砂質土である。

SK8は平面形が円形を呈する土坑である。検出状況で、直径0.4m、深さ約0.53mを測る。出土遺物は、土師質土器の擂鉢（遺物番号4）である。

SK9は平面形が不整な円形を呈する土坑である。長軸0.5m、短軸0.4m、深さ約0.44mを測る。断面観察によるとSD2を切っている。埋土の堆積状況はにぶい黄褐色砂質土で



第2-3図 SK1～5、SD3、P4・13・23・24・29 実測図 (1:30)

ある。出土遺物は、輸入陶磁器の破片（遺物番号 3）である。

SK10 は平面形が橢円形を呈する土坑である。検出状況で、長軸 0.55m、短軸約 0.3m、深さ 0.23m を測る。SK11 は平面形が円形を呈する。検出状況で、直径約 0.3m、深さ約 0.7m を測る。

出土遺物（第 2-4 図、図版 2-2）

1・2 は、備前系の大甕である。底部の復元値は 20 cm 以上が想定される。いずれも体部～口縁部が欠損しているため不明だが、16～18 世紀頃のものと想定される。

3 は輸入陶磁器の破片で、口縁部を丸くおさめ、外反している。（上田分類 D-II：15 世紀前半）龍泉窯系青磁と考えられる。

4 は土師質土器の擂鉢である。内面には 5 条 1 単位とするクシメが確認できる。口縁端部は平坦に仕上げ、中央部が僅かに窪む。

溝状遺構

SD1（第 2-2 図、図版 2-1）

調査区外へと延びる北西方向の溝状遺構である。最大幅 0.6m、深さ約 0.04m を測る。SK7 の直上に位置し、埋土の堆積状況は黄褐色砂質土である。

SD2（第 2-2 図、図版 2-1）

調査区外へと延びる北東方向の溝状遺構である。最大幅 0.2m、深さ約 0.07m を測る。SK9 に切られてことから、時間的な差異は明らかではないが、SK9 より古く構築されている可能性がある。埋土の堆積状況は灰黄褐色砂質土である。

SD3（第 2-3 図、図版 2-2）

調査区南半にて検出され、南北方向の溝状遺構である。長さ 2.3m、最大幅 0.15m、深さ約 0.09m を測る。埋土の堆積状況は褐灰色砂質土である。断面観察によると P29 を切っている。

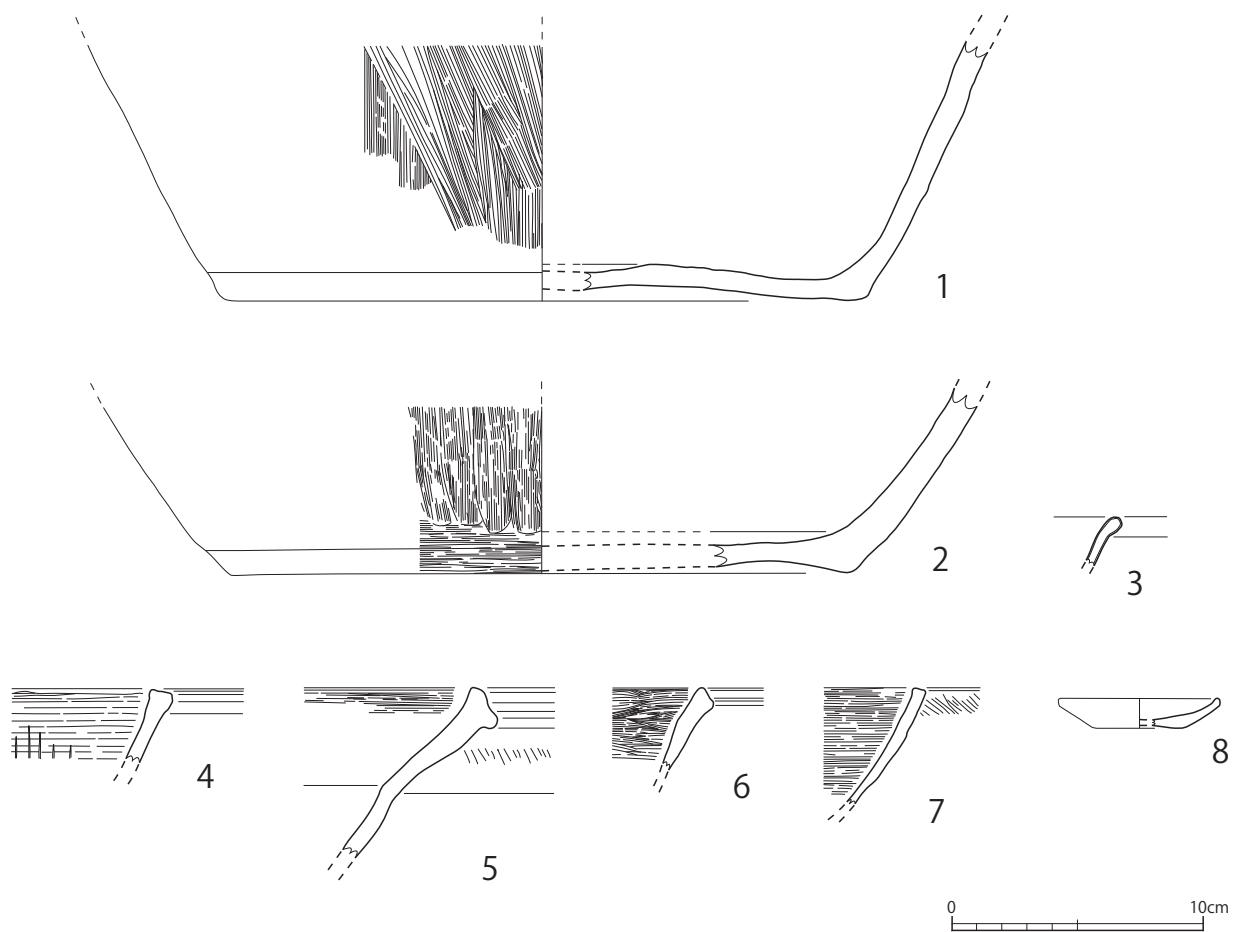
性格不明遺構

SX1～3（第 2-2 図）

SX1 は、調査区北半北東側で検出された、平面形・底面ともに不整形を呈する性格不明遺構である。調査区東側と調査区西側で検出された SX2・SX3 は、平面形が不整形を呈する性格不明遺構である。調査区外へ広がるため詳細は不明である。図示し得なかつたが、それぞれ土師質土器が出土している。

出土遺物（第 2-4 図、図版 2-2）

5 は、SX2 から出土した土師質土器の鍋である。外面にススの付着が認められる。口縁端部に鐸を巡らせ口縁下方が「く」の字に外反する。内面は摩耗しているが、刷毛目を確認することができる。



第2-4図 出土遺物実測図（1:3）

ピット群 (P1 ~ 32)

調査区内からは多くのピットが検出されているが、調査区が限定されているため、掘立柱建物跡の柱穴として復元できる明瞭な配列を確認できなかった。

ピットの規模は概ね直径 0.1 ~ 0.4m と小さいものが多く、埋土はにぶい黄褐色砂質土を呈するものが多い。調査区の北半に集中し、土坑 (SK) や溝 (SD) の周辺に配されていることが多い。ピット 32 基中 20 基から図示し得ない小破片の土師質土器が主に出土しており、それらの多くは中世から近世のものと考えられる。また、P16・22・26・30 からは、須恵器が出土している。

砂質土の埋土は分層が困難で、中でも柱痕が確認できたものは以下の 4 基である。

P4 (第 2-3 図、図版 2-2) • 13 • 23 • 24

P4 は、調査区の北半北東側で検出した。長軸約 0.36m、短軸 0.24m、深さは 0.46m の不整形を呈する。埋土に炭化物を少量含み、断面観察では直径約 0.12m の柱痕が確認された。

P13 は、調査区北半東側で検出した。直径約 0.24m、深さは 0.3m を測る。図示し得なかつたが、輸入品と考えられる青磁の小破片が出土している。

P23 直径約 0.3m、深さは 0.57m を測る。土師質土器の小皿（遺物番号 8）が出土した。

P33 は、直径約 0.15m、深さ 0.21m を測る。鉢と考えられる土師質土器（遺物番号 7）が出土した。

表 1 西中郷遺跡 遺物観察表

遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) ()は復元値	胎土	焼成	色調	調整	備考
1	SK1	陶器	大甕	口径：— 器高：残存13 底径：(34.4)	密	良	外面：灰赤 内面：にぶい赤褐 胎土色：灰赤	外面：ナデ 刷毛目（縦） 内面：ナデ	備前系
2	SK1	陶器	大甕	口径：— 器高：残存9.7 底径：(33)	密	良	外面：灰褐 内面：にぶい褐 胎土色：にぶい橙	外面：ナデ後、ヘラ目 内面：ナデ	備前系
3	SK8	土師質土器	鉢 (擂鉢)	口径：— 器高：— 底径：—	粗	良	外面：にぶい黄褐 内面：灰黄褐 胎土色：黄灰	外面：ナデ、 内面：刷毛目	胎土：極小の礫多く含む 擂目（5条）
4	SK9	青磁	碗か？	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：オリーブ灰 内面：オリーブ黄 胎土色：灰白	-	龍泉窯系か？
5	SX2	土師質土器	鍋	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：にぶい黄褐 内面：浅黄橙/にぶい黄褐 胎土色：黄灰	外面：ナデ、櫛目 内面：刷毛目	外面及び内面くびれ部以下スス付着
6	P10	土師質土器	鍋	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：にぶい黄褐 内面：浅黄橙/にぶい黄 胎土色：にぶい黄橙	外面：ナデ 内面：ナデ後刷毛目	外面スス付着
7	P33	土師質土器	鉢か？	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：暗灰黄 内面：灰黄 胎土色：黒褐	外面：ナデ後櫛目 内面：刷毛目	
8	P23	土師質土器	皿	口径：— 器高：残存1.8 底径：(3.5)	密	良	外面：浅黄橙 内面：橙 胎土色：橙	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底部：回転糸切り技法

2-III　まとめ

今回の調査は限られた調査範囲内であり、遺跡の全容はつかめなかつたが、調査成果を概観することでまとめに代えたい。

遺構について

遺構の多く（主にピット群、土坑）の埋土の状況は概ね、黄褐色～にぶい黄褐色～灰黄褐色である。

堆積状況について SD1、SK7、SK1 を観察すると、にぶい黄褐色土を覆うように黄褐色土が検出している。また、「SK6 と SD2」の切り合い関係からは、灰黄褐色の SD2 をにぶい黄褐色の SK6 が切っている。このことから、時期差の大小は明らかでないが、黄褐色→にぶい黄褐色→灰黄褐色の順に堆積状況が古くなると考えることができる。

今回の調査では柱の痕跡が残るピットが確認されており、掘立柱建物跡の存在も想定されたが、整列するものは確認できなかった。SK1 は井戸の可能性も考えられたが、地山が砂質土であり保水が困難であるため、廃棄土坑とした。

遺物について

遺物のほとんどはピットや遺物包含層から出土した。土師質土器が多く、中世～近世のものと考えられる。中世の遺物としては、SX2 からは口縁部がくの字に受け口状に広がる鍋（土師質土器 鍋 B）(1) が出土している。周辺遺跡である鏡西谷遺跡 B 地区の鎌倉時代前期～南北朝時代の遺構からも同様の土師質鍋が少量出土している。土師質土器 鍋 B は、15 世紀前半を中心とする時期に出土していることが多い。この類は西条盆地地域での流通は全体の 2% に至っていない(2)。周辺遺跡との関係性などを含め今後の検討する必要がある。その他、SX2 から 2m ほど離れた SK6 からは 15 世紀代の輸入陶磁器（青磁）の破片が出土している。

また、SK1 より、上層に 10 ~ 15 cm 程度の石と備前甕の底部が出土している。2 個体が同一土坑から出土している。いずれも、口縁部が欠損しているため、詳細は不明だが、概ね 15 世紀～18 世紀頃までのものを同時期に使用していたと考えられる。

おわりに

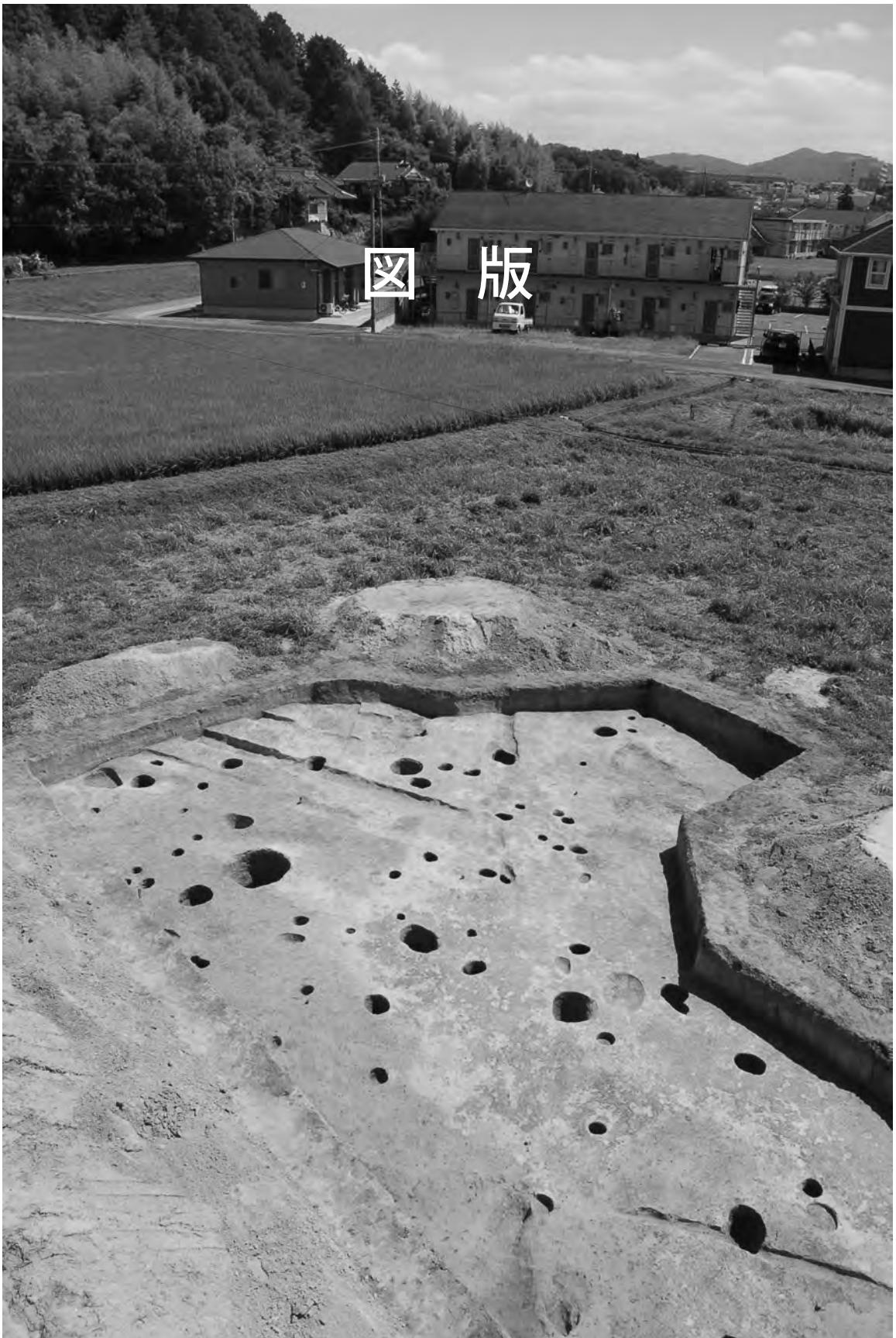
今回の調査結果から、西中郷遺跡の西端で中世の集落の一端を伺うことができた。

また、古代～近世までの遺物が出土しているが、近接する以前の調査例では古墳時代の竪穴住居跡が確認されており、古墳時代～近世まで人の営みがあった土地であると考えられる。さらに密な当時の状況を考察するために引き続き調査事例を待ちたい。

註

- (1)1996「土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ中世瀬戸内の集落遺跡』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 156～226 頁
(2)2012「出土土器から見た安芸地方の様相」『シンポジウム安芸地方の中世を探る - 中世前期を中心として -』

広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門・東広島市教育委員会 37～44 頁



完掘全景（南西から）

図版 2-1



a. 完掘全景（南西から）



b. SK1 検出状況（南西から）



d. SD3・P29 切りあい（南から）



c. SK2 断面（南から）



e. SK3 断面（南から）

図版 2-2



a. SK5 断面（南から）



b. P 4 断面（東から）



出土遺物

東広島市高屋町高屋堀

ふくじん1ごう
福神1号遺跡

例言

- 1 本書は、平成 29・30（2017・2018）年度に東広島市教育委員会（以下「市教委」という。）が有限会社セイビ不動産から委託を受けて発掘調査を実施した、（仮称）高屋堀団地に係る福神 1 号遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺構の実測・写真撮影は、石垣・日浦・盛が行った。遺物の実測は盛が、写真撮影は石垣・盛が行った。
- 3 本書の内容は調査関係者で検討し、執筆は盛が行い、編集は石垣・盛が行った。
- 4 遺物実測図と写真図版の番号は同一である。
- 5 第 1 図は東広島市発行の 1：2,500 東広島市地形図（M-11・N-11）を使用した。

本文目次

3- I はじめに	3-1
3- II 遺構と遺物	3-4
(1) 調査の概要	3-4
(2) 遺構と遺物	3-4
3- III まとめ	3-13

挿図目次

第 3-1 図 福神 1 号遺跡周辺地形図（1：2,500）	3-2
第 3-2 図 福神 1 号遺跡遺構配置図（1：200）	3-3
第 3-3 図 SB-1・2 実測図（1：60）	3-5
第 3-4 図 B 区 SD1～3・5、SK1、SX12、P11・12 実測図（1：40）	3-7
第 3-5 図 B 区 SD7・8、SK2、P33、SX9 実測図（1：10、1：40、1：60）	3-10
第 3-6 図 出土遺物実測図（1：3）	3-11

表目次

表 1 福神 1 号遺跡出土遺物観察表

図版目次

図版扉 完掘全景（北東から）

図版 3-1a. 調査前近景（南西から）	c. SD3 遺物出土状況（北東から）
b. A 区完掘（北東から）	d. SX9 遺物出土状況（東から）
c. SX1 断面（南東から）	e. SK1 完掘（北東から）
d. C 区確認調査土層（南西から）	f. SK2 完掘（南西から）
図版 3-2a. B 区完掘（北東から）	図版 3-4a. P1・2 検出状況（南西から）
b. SB1・2 完掘（北東から）	b. P1 断面（南から）
c. SD6 完掘（北東から）	c. P2 断面（南から）
d. SD8 完掘（南から）	d. P33 遺物出土状況（南東から）
図版 3-3a. SD4 完掘（南西から）	e. SX3 遺物取り上げ作業（北から）
b. SD5 完掘（北から）	図版 3-5 出土遺物 1
	図版 3-6 出土遺物 2

3- I はじめに

福神 1 号遺跡は、(仮称) 高屋堀団地に係る発掘調査に伴って広島県東広島市高屋町高屋堀で発掘調査が実施された。以下、調査に至る経緯を概述する。

平成 29 年 2 月 2 日付けで有限会社アド企画設計から東広島市教育委員会教育長へ文化財の有無及び取扱いについて協議があった。東広島市教育委員会(以下「市教委」という。)は、計画地の一部は周知の埋蔵文化財包蔵地「福神 1 号遺跡」であるため平成 29 年 2 月 17 日付け、東広教文第 609 号で遺跡が存在する旨回答した。

市教委と事業者で、遺跡の現状保存について協議を重ねたが、計画変更は困難ということになり、記録保存も止むを得ないとして基本合意した。

平成 29 年 5 月 16 日付けで、事業者である有限会社セイビ不動産から埋蔵文化財発掘の届出（土木工事の届出）が提出された。公園は慎重工事の対象となつたが、団地内道路と切土部分については現状保存が困難であると判断され、記録保存のための事前の発掘調査が必要な旨を平成 29 年 5 月 23 日付け、東広教文第 136 号で通知した。

平成 29 年 6 月 14 日付けで有限会社セイビ不動産から市教委あてに発掘調査の依頼が提出され、平成 29 年 6 月 28 日付け、東広教文第 228 号で承諾する旨回答した。平成 29 年 10 月 18 日付けで、有限会社セイビ不動産と発掘調査の業務委託契約と覚書が締結され、平成 29 年 12 月 12 日から平成 30 年 2 月 13 日まで発掘調査（現地調査）を実施した。報告書作成作業及び収蔵作業は平成 30 年 5 月 23 日付けで契約を締結して実施した。

本書は、以上のような経緯を経て実施した発掘調査の成果をまとめたものである。当地の文化財資料として、また文化・歴史探究の一助として広く活用していただければ幸いである。

事業者である有限会社セイビ不動産、調整等を図っていただいた有限会社アド企画設計から発掘調査・整理作業・報告書作成作業の便宜を図っていただいた。また、発掘調査にあたつて、土地の所有者や地域の方々の多大なご協力を得た。末筆ながら記して心から感謝の意を表したい。

調査体制

平成 29・30 年度

東広島市教育委員会

教育長：津森 毅

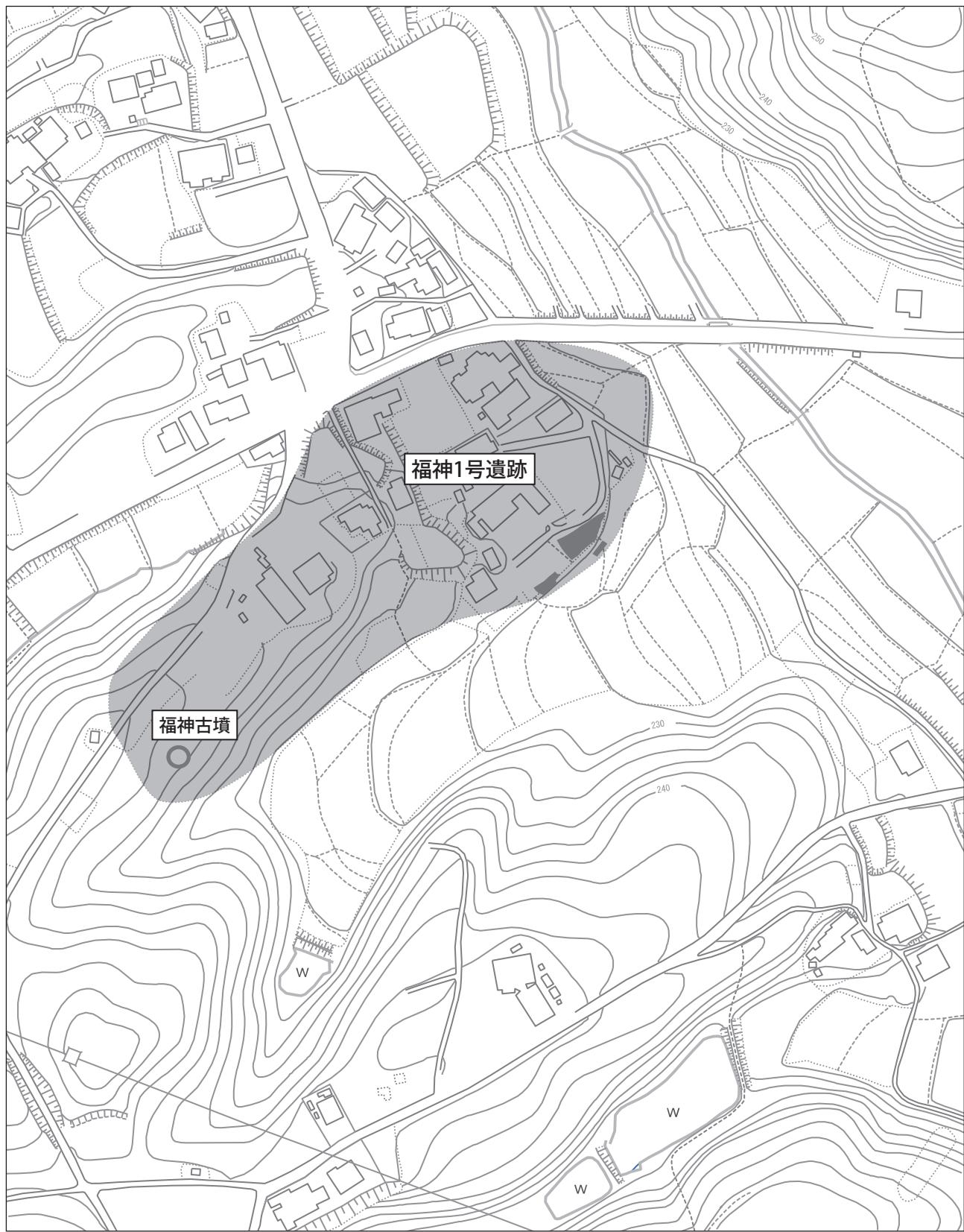
生涯学習部長：下宮 茂（平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日）、國廣政和（平成 30 年 4 月 1 日～）

生涯学習部次長兼文化課長：岡田誠有（平成 29 年 4 月 1 日～）

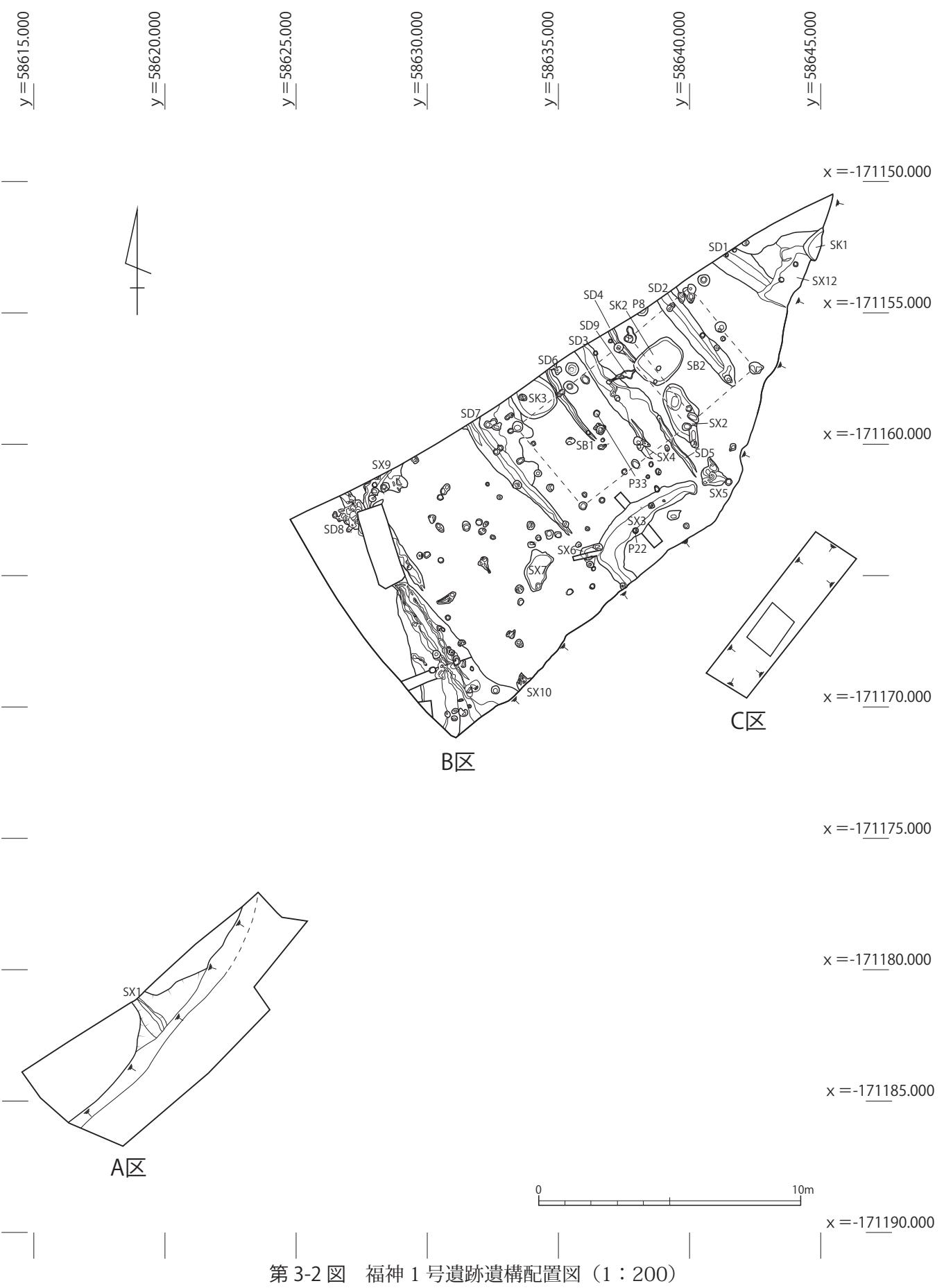
参事兼出土文化財管理センター所長兼調査係長：妹尾周三

調査 調査係主査：石垣敏之、埋蔵文化財調査員：日浦裕子、盛 菜つみ

事務 調査係主査：松仁 猛（平成 29 年 4 月 1 日～）、事務職員：片山由紀子



第3-1図 福神1号遺跡周辺地形図（1：2,500）



第3-2図 福神1号遺跡遺構配置図 (1:200)

3-II 遺構と遺物

(1) 調査の概要

調査区は3つに分断されており、便宜上にA～C区に分けて実施した。

発掘調査は、試掘調査によって得られたデータ（遺構面までの深さ、堆積土・遺物包含層の状況、遺物の出土状況など）を基に、重機を使用して表土を掘削し、遺構検出面を人力で精査して行った。

A区は、南東側を後世の削平を著しく受けしており、北西側に性格不明遺構1基を確認したのみである。

B区は、南東側に向けて緩やかに傾斜している。表土直下で黄褐色系砂質土の遺構面が遺存している。遺構面の標高は、264.6m～265.7mである。

C区は、B区の東側に設定した遺構確認用のトレーニングである。当初は、遺跡範囲内の団地内道路部分も調査対象となっていたが、著しく削平されていることが推測されたため、トレーニングを設定した。その結果、B区遺構面より3m程度掘削されており、遺構が全く残されていなかったため調査対象から除外した。

検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構9条、土坑3基、性格不明遺構10基、ピット38基である。

遺物は、須恵器、土師質土器、輸入陶磁器などがコンテナ5箱分（340mm×540mm×100mm）出土した。そのほとんどは図示し得ないほどの小破片である。

(2) 遺構と遺物

掘立柱建物跡

SB1（第3-3図、図版3-2）

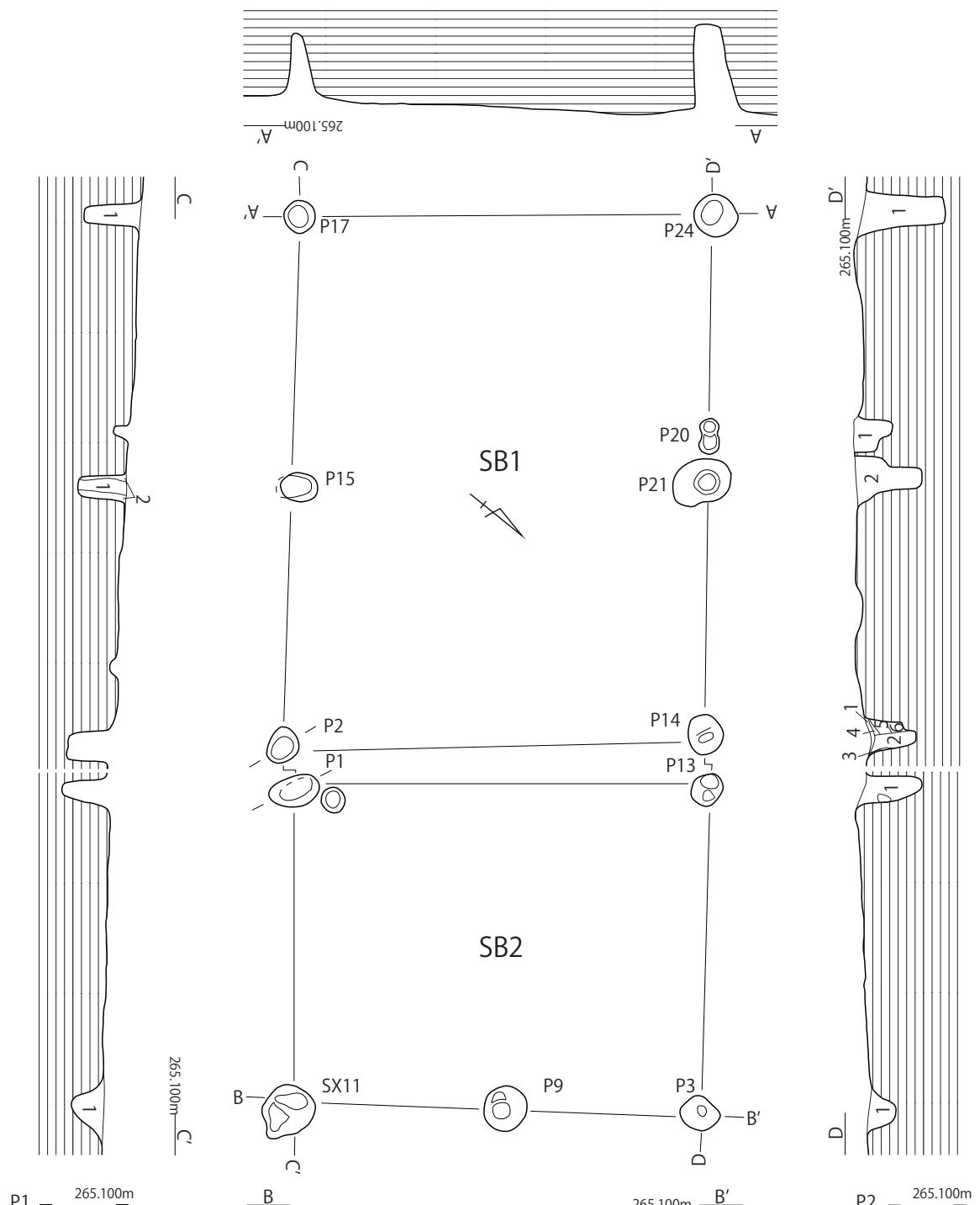
B区で検出された、主軸が南西-北東に向いた、柱間1間×2間（約4m×5m）の規模をもつ掘立柱建物跡である。柱穴の規模は、直径約0.3m～0.54m、深さ0.33m～0.72mを測る。桁間は、南側が（南西からP17-P15-P2）2.5m-2.5m、北側が（南西からP24-P21-P14）を測る。梁間は西側が4m、東側が4mである。

柱穴の断面を観察すると、P15、P2、P14は柱痕と考えられる土層が柱穴の底部まで続いている。P21、P24、P17は柱穴状の土層断面はみられず、1層である。

SB2（第3-3図、図版3-2）

SB1に近接する、主軸が南西-北東に向いた、柱間1間×1間（約4m×3m）の規模をもつ掘立柱建物跡である。柱穴の規模は、直径約0.3m～0.5m、深さ0.32m～0.58mを測る。桁間は、南側が（南西からP1-SX11）3m、北側が（南西からP13-P3）を測る。梁間は西側が4m、東側のみ小ピットがあり、（北西からP3-P9-SX11）2m-2mである。

なお、SB1とSB2の間は0.5mと非常に近接している。両者に切り合い関係はなく、同時に存在していたか、建て替えや増設の可能性もある。また、一棟の建物跡だった可能性も考えられる。出土遺物がないため、構築時期は不明である。



土層説明

P17:1 褐色土
P15:1 褐色土（炭化物を少量含む）
2 黄褐色土（炭化物を微量に含む）
P2 :1 褐色土（2層の一部か？）
2 褐色土（炭化物を少量含む）
3 褐色土（炭化物を少量含む）
4 褐色土（地山ブロックをまばらに含む）
P1 :1 褐色土（炭化物を若干量含む）
SX11:1 褐色土

P24 :1 褐色土
P20 :1 褐色土（地山土をまばらに含む）
P21 :2 褐色土（炭化物を若干含む）
P14 :1 褐色土（炭化物を微量に含む）
2 褐色土（土層下部にて炭をブロック状に含む）
3 褐色土 4 褐色土 5 褐色土 6 明黄褐色土
P13 :1 褐色土（炭化物を微量に含む）
P3 :1 褐色土（炭化物を一部に集中して含む）
P9 :1 褐色土（炭化物を微量に含む）

第3-3図 B区SB1・2実測図 (1:60)



土坑

SK1（第3-4図、図版3-3）

B区で検出された、平面形が三角形を呈する土坑である。検出状況で、一辺 $0.7m \times 1m \times 1.3m$ で、深さ約 $0.42m$ を測る。埋土の堆積状況はにぶい黄褐色やや砂質土である。SX12と切り合い関係にあり、SK1はSX12の埋土直下で検出されている。調査区範囲によりこれ以上の発掘は行えなかったが、おそらく谷側は後世の削平を受けており、全体像は不明である。SK1からの出土遺物はない。

SK2（第3-5図、図版3-3）

B区で検出された、平面形が楕円形を呈する土坑である。検出状況で、長軸 $1.82m$ 、短軸約 $1.4m$ 、深さ $0.3m$ を測る。SD4とSD9を切って存在する。このことから、SD4・SD9から水を引き込んでいた可能性が考えられる。埋土の堆積状況は黄褐色砂質土とオリーブ褐色砂質土を、炭化物を微量に含む褐色土と直径 $3cm$ ほどの礫を含んだ黄褐色砂質土が覆っている。検出場所は SB1 と SB2 の間の隙間から SB2 の中央部までに収まっている。図示し得ない土師質土器片が出土している。

SK3（第3-2図）

B区で検出された、平面形が不整な円形を呈する土坑である。検出状況で、長軸約 $1.6m$ 、深さ約 $0.1m$ を測る。耕作土直下から掘り込まれており、比較的新しい土坑と考えられる。SD6と切り合い関係にあり、SK3がSD6を切っていることが確認できた。図示し得ない須恵器片と水晶が出土している。

溝状遺構

SD1（第3-4図）

B区の北東側で検出され、調査区外へと延びる北西 - 北東方向の溝状遺構である。最大幅 $3.1m$ 、深さ約 $0.14m$ を測る。図示し得ない土師質土器片と鉄釘 1点が出土している。

SD2～7（第3-4・3-5図、図版3-2・3）

B区で検出された北西 - 南東方向の溝状遺構である。掘立柱建物跡と主軸を同じくしており、何らかの関係性が認められるが、詳細は不明である。

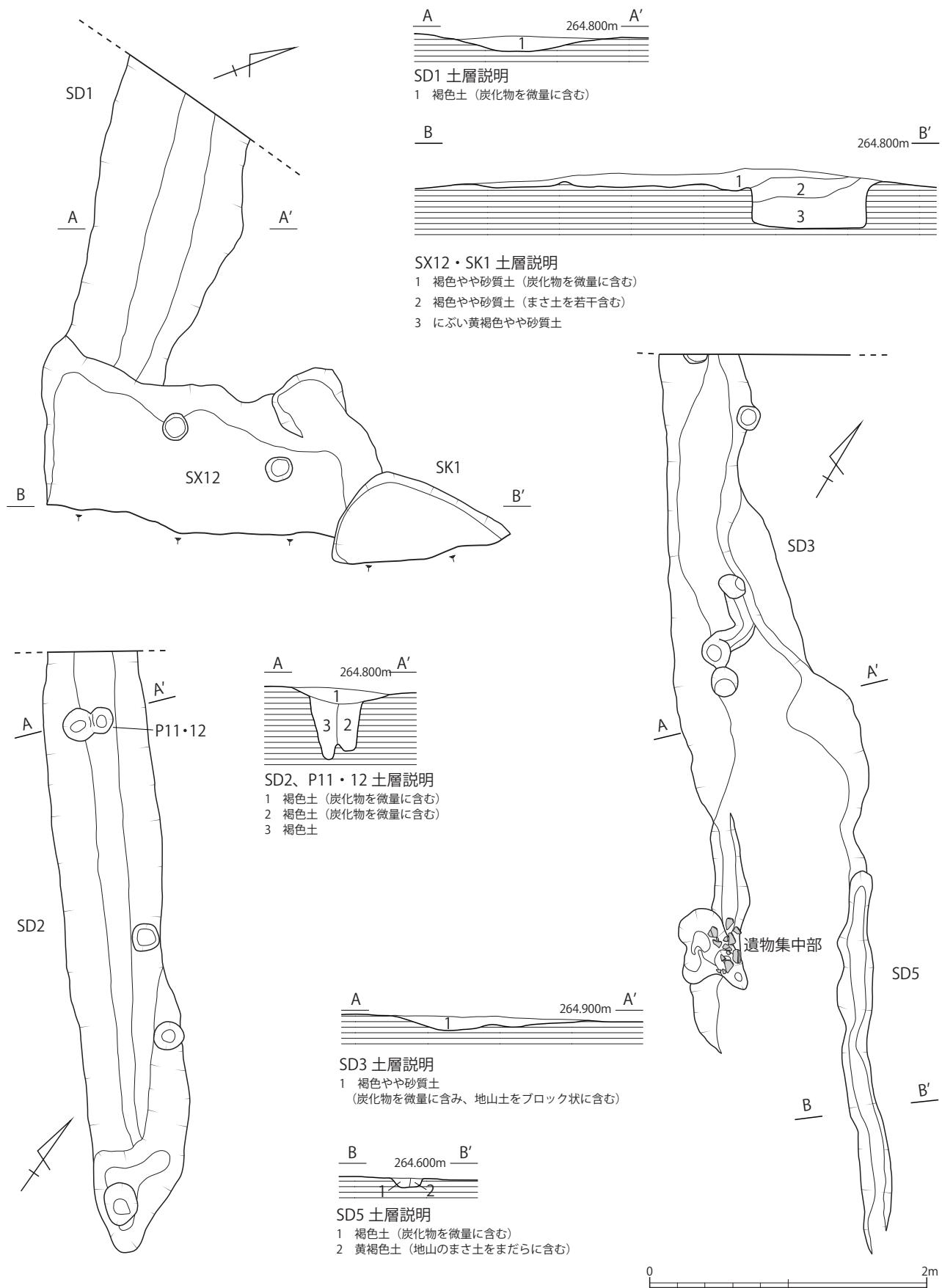
SD2は、最大幅 $0.7m$ 、深さ約 $0.1m$ を測る。直下でピットが検出されている。埋土の堆積状況は炭化物を微量に含む褐色土と黄褐色土である。図示し得ない土師質土器片が出土している。

SD3は、最大幅 $1.2m$ 、深さ約 $0.1m$ を測る。調査区から $2.2m$ 程度で徐々に両側が広がっている。中央部には、東西方向の溝 SD9 が存在する。SD9は SK2 と SD3 をつなぎ、水路として機能していた可能性がある。土師質土器の鍋（1）などが出土している。

SD4は、最大幅 $0.26m$ 、深さ約 $0.05m$ を測る。直下には P14 が検出されている。図示し得ない土師質土器片が出土している。

SD5は、SD3の南東部で検出され、最大幅 $0.25m$ 、深さ約 $0.05m$ を測る

SD6は、最大幅 $0.3m$ 、深さ約 $0.2m$ を測る。SK3・P20と切り合い関係にあり、両者よ



第3-4図 B区 SD1～3・5、SK1、SX12、P11・12 実測図 (1:40)

り以前に構築された遺構である。図示し得ない土師質土器杯などが出土している。

SD7 は、最大幅 1.35m、深さ約 0.18m を測る。埋土の堆積状況は炭化物を若干量含む黄褐色土である。出土遺物は、青磁片と土師質土器の小皿が出土している。

出土遺物（第 3-6 図、図版 3-5・6）

1 は、SD3 から出土した土師質土器の鍋である。口縁直下に断面がやや角ばった、鍔を貼り付けており、鍔から下部はスヌが付着する。

2・3 は、SD7 から出土している。2 は輸入陶磁器の破片で、外面に蓮華弁文が片堀されている。龍泉窯系の青磁碗と考えられる。3 は土師質土器の皿である。

SD8（第 3-5 図、図版 3-2）

B 区の南西側で検出され、調査区外へと延びる北西 - 北東方向の溝状遺構である。調査区南西に設置されたトレンチからハの字状に広がり、南東側調査区へ流れ込んでいる。最大幅 3.8m、深さ 0.05 ~ 0.1m を測る。出土遺物は、土師質土器の鍋の他、須恵器片数点、瓦質の鍋 1 点、近世の青磁片（混じりこみか）も 1 点出土している。

出土遺物（第 3-6 図、図版 3-6）

4 は土師質土器の鍋で、外面にはスヌがべったりと付着している。内面には刷毛目による調整が施されている。口縁部を丸くおさめ、口縁下部を肥厚させている。他の土師質土器よりやや時代が下る可能性がある。

性格不明遺構

SX1（第 3-2 図、図版 3-1）

A 区で検出された、平面形が不整な性格不明遺構である。南東側は後世の削平を著しく受けている。出土遺物は、土師質土器と江戸時代初頭頃の唐津と考えられる陶器皿が出土している。

SX2（第 3-2 図）

B 区 SB1 と SB2 の中間地点で検出された、平面形が不整な性格不明遺構である。P1 と P2 の直上に位置する。図示していないが、土師質土器杯などが出土している。

SX3（第 3-2 図、図版 3-4）

両者とも B 区 SB1 の南東隣に位置し、平面形が不整な性格不明遺構である。SX6 に切られる形で存在する。出土遺物は土師質土器の鍋などである。

出土遺物（第 3-6 図、図版 3-5）

5 は土師質土器の鍋（羽釜）で、外面にスヌの付着が認められる。口縁端部を「コ」字状に仕上げ、口縁下部に鍔を巡らせている。

SX4～SX7・10（第 3-2 図）

いずれも平面形・断面ともに不整形を呈する性格不明遺構である。樹木根などが想定されるが、詳細は不明である。SX5 から土師質土器片などが、SX6 から須恵器片が出土している。

SX9（第 3-5 図、図版 3-3）

SX9 は B 区の南西側で検出された、平面・底面とも不整形を呈する遺物集中部である。

SD8 と接しているが、詳細は不明である。土師質土器の小皿、壺などが複数出土している（遺物番号 6～9）。

出土遺物（第 3-6 図、図版 3-6）

6～8 は土師質土器の皿である。6・7 は、底部に回転糸切技法を施す。8 は欠損しているため不明である。9 は土師質土器の壺である。底部は欠損しているため不明である。胎土色は浅黄色系（6）、灰白色系（7・8）、橙色系（9）に分かれている。

ピット（第 3-2・3-5 図、図版 3-4）※SB1・SB2 は除く

ピットは、B 区のほぼ全域から検出されている。38 基中 13 基から遺物が出土しているが、ほとんどは図示し得ないほどの小破片である。小破片のため不明なものも存在するが、ほぼ全てが土師質土器と考えられる。

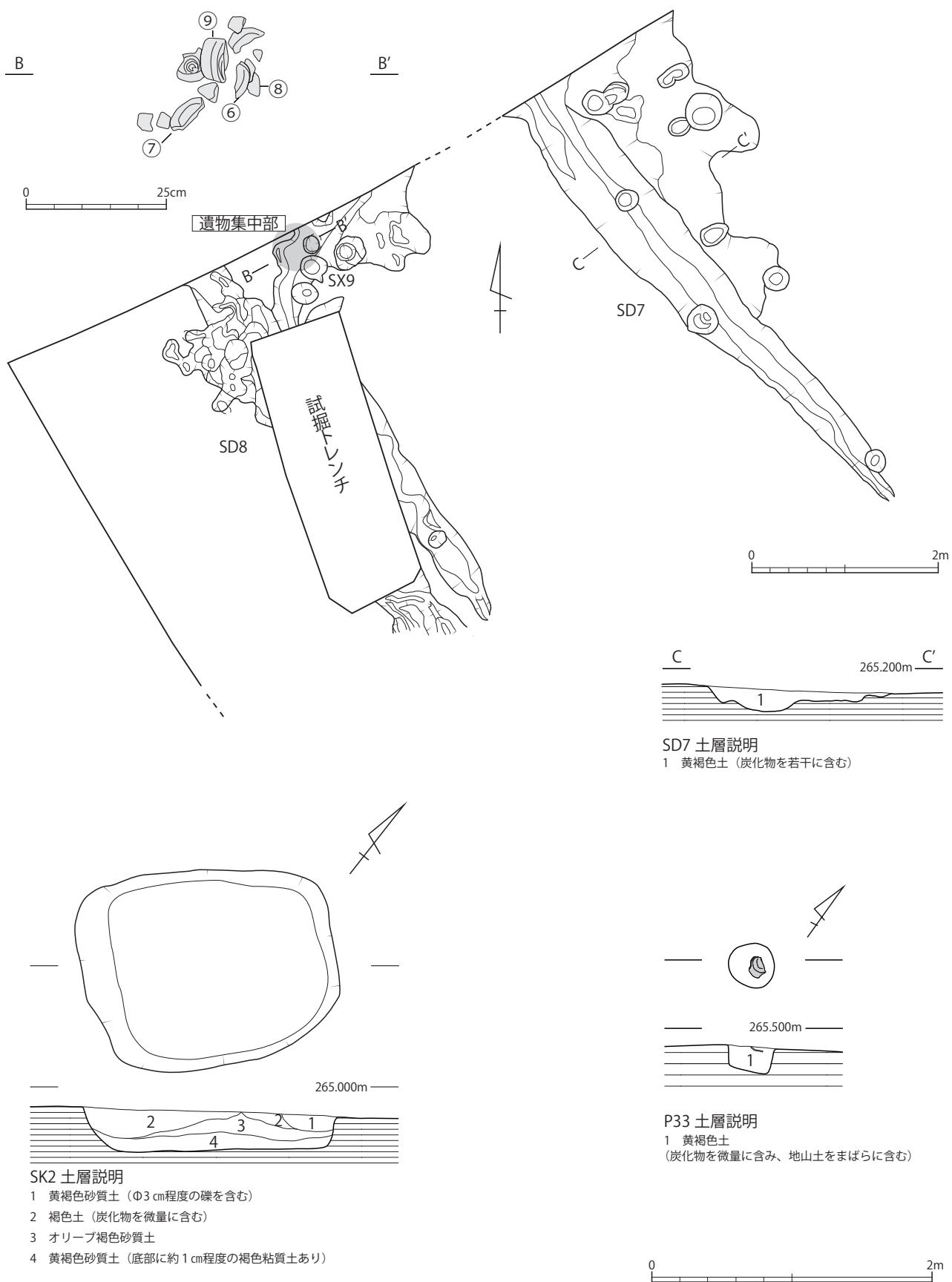
P8 は B 区北側調査区際で検出した。検出状態で、直径約 0.4m、深さは 0.2m を測る。土師質土器の壺（10）が出土した。

P22 は SX3 埋土直下で検出された。直径約 0.2m、深さは 0.4m を測る。出土遺物はないが、柱痕が確認された。

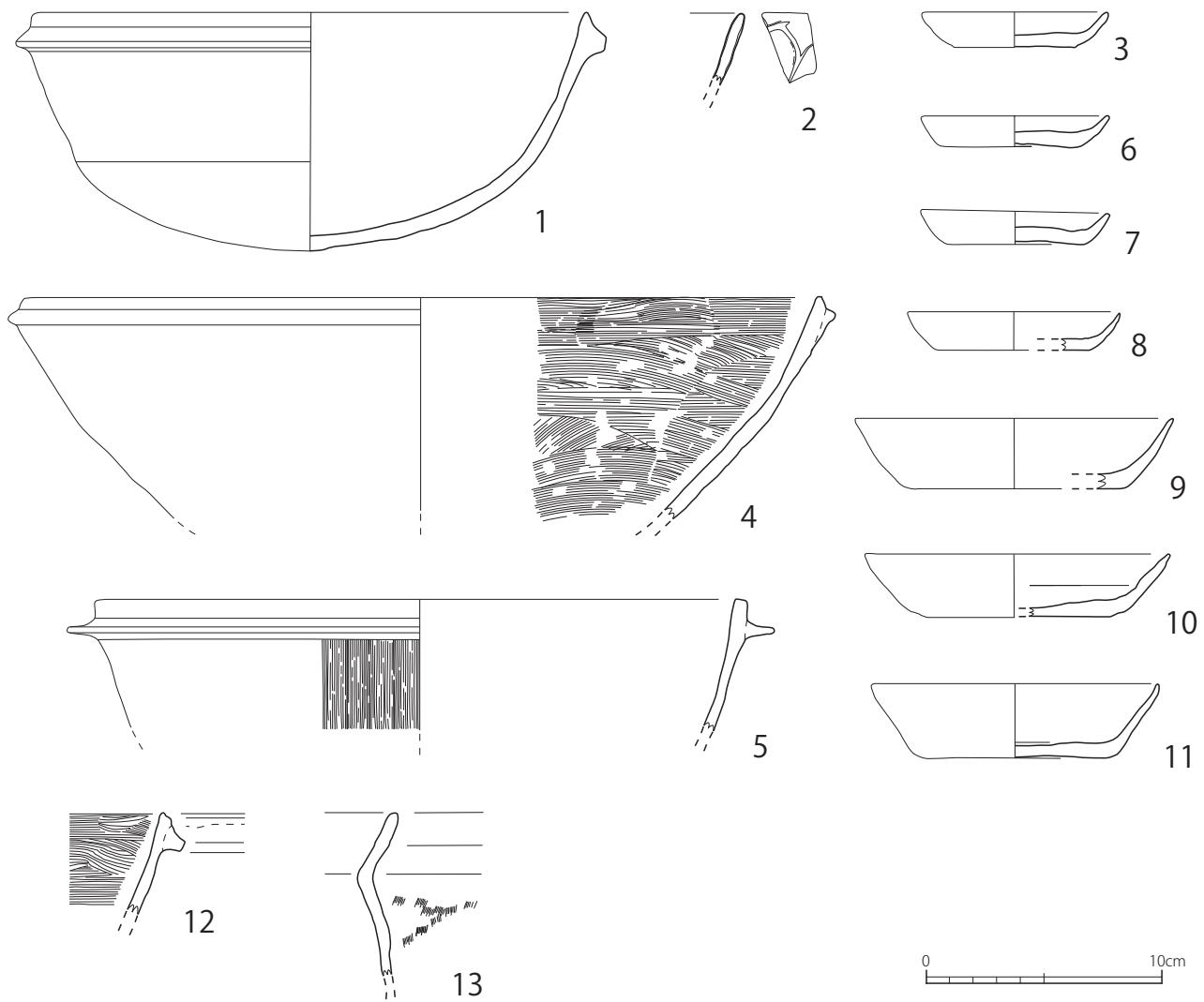
P33 は SD3 と SD6 の間、SB1 のほぼ中央で検出されたが、建物跡と関係があるのかは不明である。直径約 0.25m、深さは 0.2m を測る。土師質土器の壺（11）が出土した。

遺構外の出土遺物

12 は土師質土器の鍋である。口縁直下に、断面がやや角ばった「コ」字状の鐸を貼り付けている。13 は土師器の甕型土器で、外面にハケメがみられる。



第 3-5 図 B 区 SD7・8、SK2、P33、SX9 遺物集中部実測図 (1 : 10、1 : 40、1 : 60)



第3-6図 出土遺物実測図（1:3）

表1 福神1号遺跡 遺物観察表

遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) ()は復元値	胎土	焼成	色調	調整
1	SD3	土師質土器	鍋	口径：(23.6) 器高：(10.1) 底径：—	密	良	外面：褐灰 内面：黄橙 胎土色：橙	外面：ナデ 内面：ナデ
2	SD7	青磁	青磁片 (碗か?)	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：暗オリーブ 内面：オリーブ灰 胎土色：灰	外面：施釉 内面：施釉
3	SD7	土師質土器	小皿	口径：8 器高：(1.5) 底径：5.2	密	良	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙 胎土色：浅黄橙	外面：ナデ 内面：ナデ
4	SD8	土師質土器	鍋	口径：(34) 器高：— 底径：—	粗	良	外面：にぶい黄橙 内面：浅黄橙 胎土色：暗褐	外面：ナデ 内面：ナデ後刷毛目
5	SX3	土師質土器	鍋	口径：(28) 器高：— 底径：—	密	良	外面：黄橙/灰黄橙 内面：浅黄橙 胎土色：にぶい黄橙	外面：刷毛目 内面：風化のため不明瞭
6	SX9	土師質土器	小皿	口径：8 器高：2.9 底径：5.4	密	良	外面：灰白 内面：灰白 胎土色：浅黄橙	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ
7	SX9	土師質土器	小皿	口径：8 器高：2.5 底径：5.4	密	良	外面：灰白 内面：灰白 胎土色：灰白	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ
8	SX9	土師質土器	坏	口径：(13.5) 器高：3 底径：(9)	密	良	外面：灰白 内面：灰白 胎土色：灰白	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ
9	SX9	土師質土器	小皿	口径：(9) 器高：1.5 底径：(6.6)	密	良	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙 胎土色：にぶい橙	外面：風化のため不明瞭 内面：風化のため不明瞭
10	P8	土師質土器	坏	口径：(13.2) 器高：2.7 底径：(8)	密	良	外面：浅黄橙 内面：橙 胎土色：橙	外面：風化のため不明瞭 内面：風化のため不明瞭
11	P33	土師質土器	坏	口径：(12) 器高：3.2 底径：(8)	密	不良	外面：明黄褐 内面：浅黄橙 胎土色：浅黄橙	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ
12	B区 検出面	土師質土器	土器片 (鍋か?)	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：橙 内面：にぶい褐 胎土色：橙	外面：刷毛目 内面：ナデ、ユビオサエ
13	B区 検出面	土師器	鍋	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：浅黄 内面：浅黄橙 胎土色：淡黄	外面：刷毛目 内面：ナデ

3-III　まとめ

今回の発掘調査は調査区が限定的になり、遺跡の全容はつかめなかつたが、問題点を指摘することでまとめに代えたい。

遺構について

掘立柱建物跡

SB1 と SB2 両者は、同時期に存在していたか、または時期をずらして建築されていたかは不明である。また、両者の間の間隔（約 0.5m 程度）のことを考慮し、両者合わせて 1 棟であった可能性も捨てがたい。しかし、出土遺物はなく、時期や構造について説明できる資料は得られなかった。本報告書では 2 棟に分かれていたと仮定し、SB1 について触れていく。

◎SB1…主軸：南西 - 北東、柱間：1 間 × 2 間（約 4m × 5m）

SB1 は南東：P17-15-2、北西：P24-21-14 で構成されている。その中で、P2 は SX2 の直下で発見されていることから、P2 の方が SX2 より時期的に古いと判断できる。したがって、P2 を含む柱穴で構成されている SB1 も SX2 より古いと推測することができる。しかし、SX2 も SB1 も時期断定が可能な遺物がない。そのため年代は確定することはできないが、過去の調査例を参考に、概ね室町時代頃の建物跡であると考えられる。

用途についても疑問点が多い。煤が付着した鍋の破片等は採集できたが、（検出時の環境にも依存するが）火を使った炉痕などが見当たらない。また、1 間の距離（P27-17）が比較的長いことや床面が緩やかな傾斜であることから馬小屋や作業小屋等の可能性も考えたが、出土遺物が少なく、明確な判断基準となるものもないため、ここでは言及を避けたい。

溝状遺構

また、1m～3m 間隔で規則的に存在する溝状遺構については、掘立柱建物跡と軸を同じくしており、利用法など、あらゆる可能性を考えたが、決めてとなる資料は出土しなかった。ただ、切り合い関係から SD3 から SD9 を利用して SK2 へ水を流していた可能性がある。SK2 の利用方法等は分からぬが、人工的に溝の流れを変えていたと考えることができる。

遺物について

遺物の多くは、溝状遺構や性格不明土坑から出土し、ほぼ土師質土器が占めており、16世紀代と考えられる輸入青磁片の 1 点だけでは時期の特定は困難である。

なお、近隣遺跡に土師質土器皿が多量に出土した御土居遺跡（中世城館）があり、両遺跡の関係性は不明だが中世高屋の様子を伺う貴重な資料を得ることができたと言えよう。

また、須恵器や土師器といった古墳時代～古代の遺物も若干が出土しており、「弥生～古墳時代の包含地」とされている遺跡の性格など、今後の課題としたい。



図 版

完掘全景（北東から）

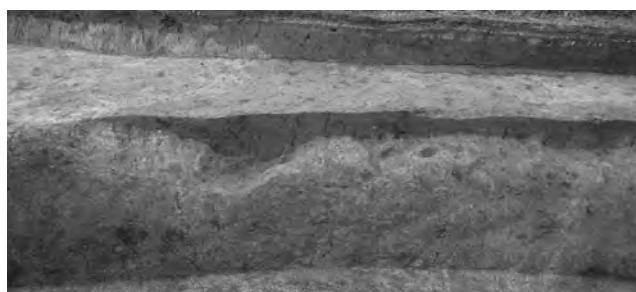
図版 3-1



a. 調査前風景（南西から）



b. A 区完掘（北東から）

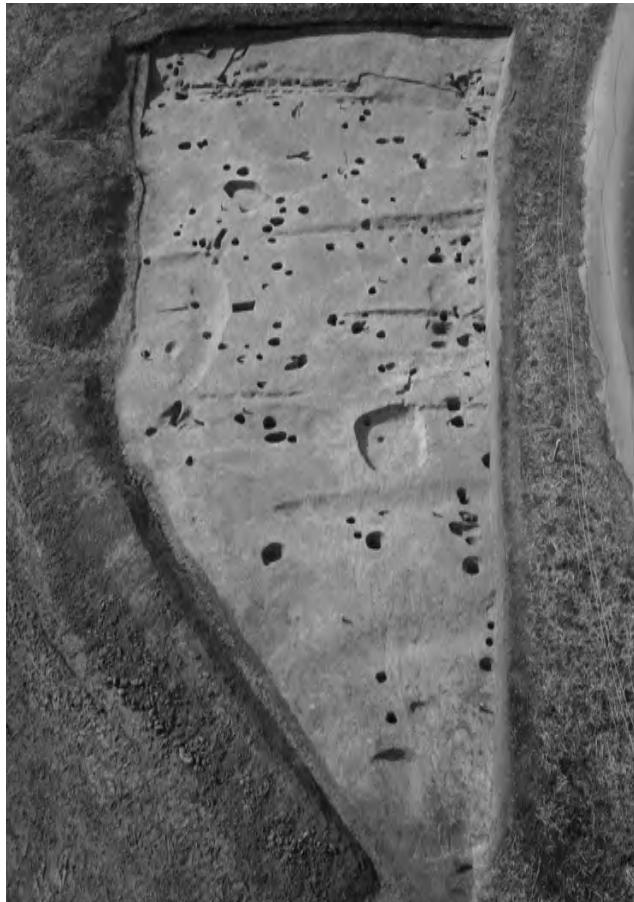


c. SX1 断面（南東から）

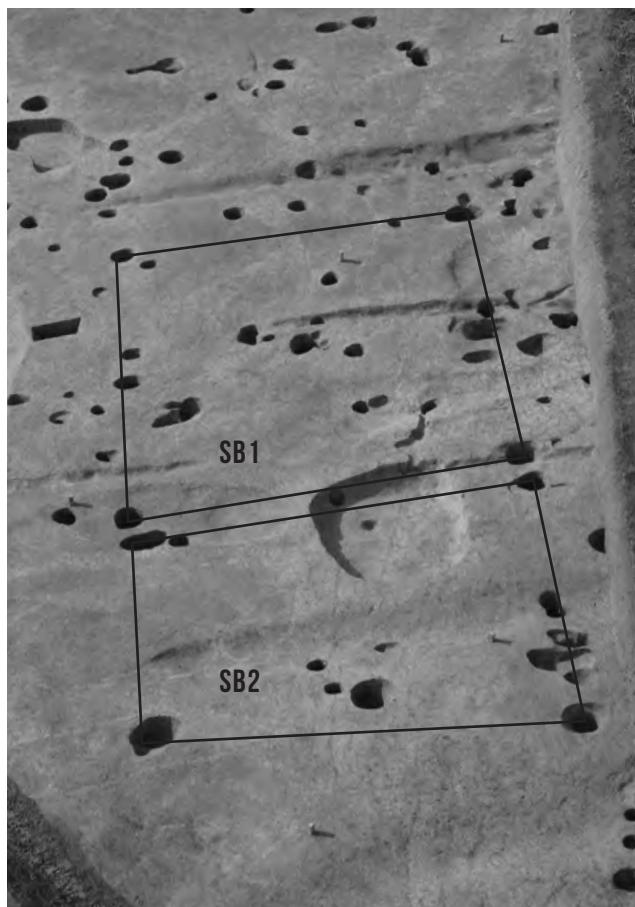


d. C 区確認調査土層（南西から）

図版 3-2



a. B 区完掘（北東から）



b. SB1・2 完掘（北東から）



c. SD6 完掘（北東から）



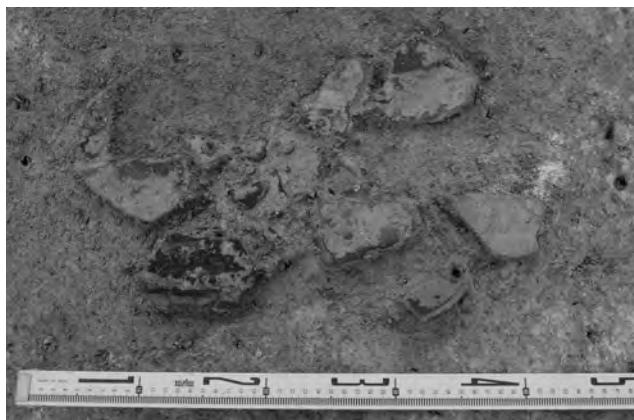
d. SD8 完掘（南から）



a. SD4 完掘（南西から）



b. SD5 完掘（北から）



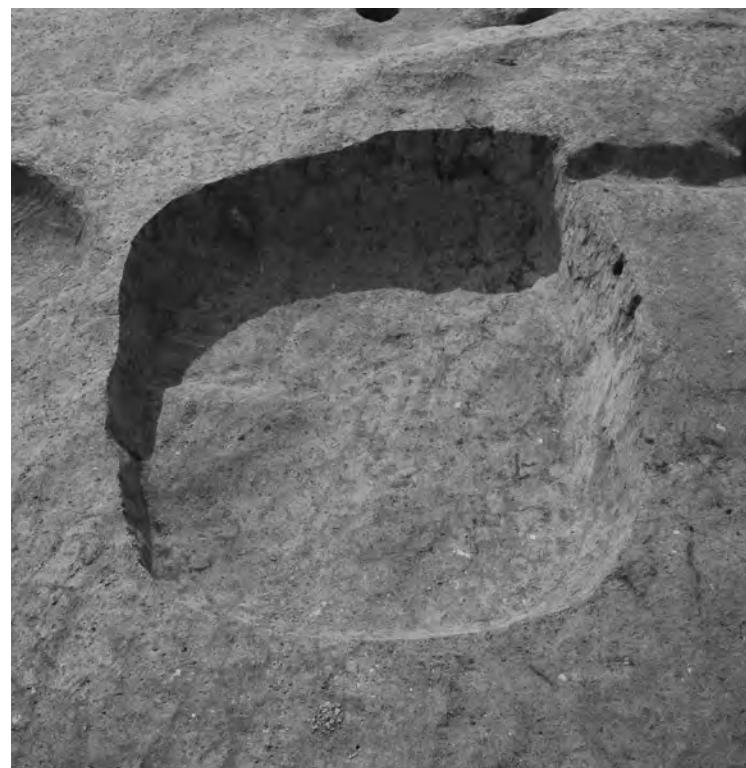
c. SD3 遺物出土状況（北東から）



d. SX9 遺物出土状況（東から）

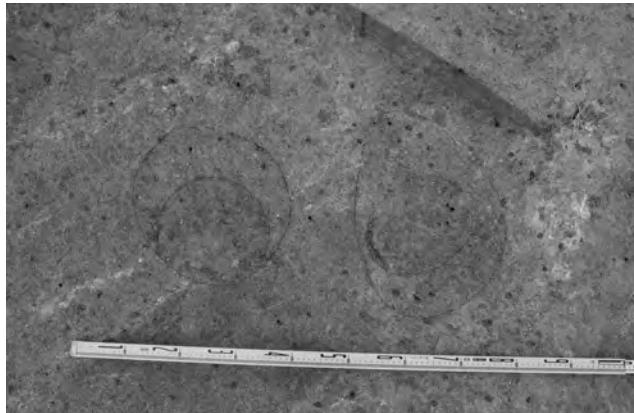


e. SK1 完掘（北東から）



f. SK2 完掘（南西から）

図版 3-4



a. P1・2 検出状況（南西から）



b. P1 断面（南から）



c. P2 断面（南から）



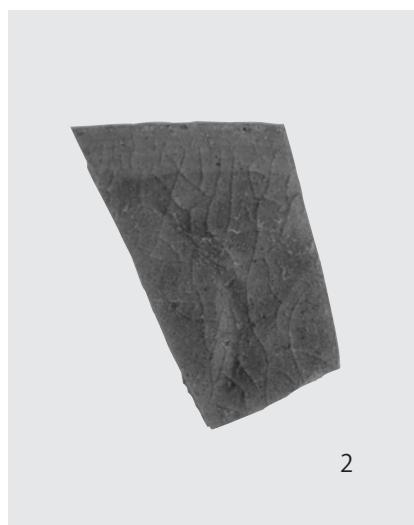
d. P33 遺物出土状況（南東から）



e. SX3 遺物取り上げ作業（北から）



4



2



5

出土遺物 1

図版 3-6



6



3



7



9



11



8



10



12



13

出土遺物 2

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひがしひろしましないいせきはくつちょうさほうこくしょに							
書名	東広島市内遺跡発掘調査報告書 2							
副書名	諏訪神社周辺遺跡、西中郷遺跡、福神 1 号遺跡							
巻次								
シリーズ名	東広島市教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 61 集							
編著者名	石垣敏之、盛菜つみ							
編集機関	東広島市教育委員会（東広島市出土文化財管理センター）							
所在地	〒739-2201 広島県東広島市河内町中河内 651 番地 7 TEL 082-420-7890							
発行機関	東広島市教育委員会							
所在地	〒739-8601 広島県東広島市西条栄町 8 番 29 号							
発行年月日	西暦 2019 年 3 月 29 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号	34212	269	34° 25' 53"	132° 44' 12"	20170410 ～ 20170414	38 m ²	西条東北町 D-room 新築工事
すわじんじゅしゅ うへんいせき 諏訪神社周辺遺跡	ひがしひろしま さいじょうひがし きたまち 東広島市 西条東北町							
にしなかごう いせき 西中郷遺跡	ひがしひろしま さいじょうちょう たぐち 東広島市 西条町田口	34212	876	34° 23' 27"	132° 42' 53"	20170725 ～ 20170808	150 m ²	田口西中郷 宅地開発事業
ふくじんいちごう いせき 福神 1 号遺跡	ひがしひろしま たかやちょうたか やほり 東広島市高屋町高屋堀	34212	702	34° 27' 19"	132° 48' 17"	20171212 ～ 20180213	654 m ²	(仮称) 高屋 堀団地
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
諏訪神社周辺遺跡	集落跡	弥生 古墳	溝状遺構 5 条 土坑・性格不明土坑 2 基 ピット 8 基		弥生土器 土師質土器 ガラス小玉		ガラス小玉が出土	
西中郷遺跡	集落跡	中世	溝状遺構 3 条 土坑・性格不明土坑 13 基 ピット 32 基		土師質土器 陶磁器 須恵器		ピットを多数検出	
福神 1 号 遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡 2 棟 溝状遺構 9 条 土坑・性格不明土坑 14 基		土師質土器 陶磁器 須恵器		掘立柱建物跡などを検出	

東広島市教育委員会文化財調査報告書 第61集
東広島市内遺跡発掘調査報告書 2

発行日 2019（平成31）年3月29日

編 集 東広島市教育委員会（東広島出土文化財管理センター）
〒739-2201 広島県東広島市河内町中河内 651 番地 7

発 行 東広島市教育委員会
〒739-8601 広島県東広島市西条栄町 8 番 29 号

印 刷 有限会社アラ・アド
〒739-0022 東広島市西条町上三永 1675 番地